



②阿弥陀如来立像 (大字下田原 法元寺藏)

# 四條畷市文化財調査年報

第 2 号



平成27(2015)年3月

四條畷市教育委員会

## 例 言

1. 本書は、四條畷市文化財調査年報の第2号であり、四條畷市文化財調査報告の第51集である。本書には、平成24(2012)年7・8月に実施した、下田原地区所在、真言宗御室派遍照山法元寺の美術工芸品(彫刻)調査報告と、平成23(2011)年6月に四條畷市立歴史民俗資料館の依頼で実施した、歴史講座の記録を掲載する。
2. 法元寺の美術工芸品調査は、四條畷市教育委員会が行っている市史編さん事業の一環として行った。四條畷市立歴史民俗資料館の歴史講座は、文化財保護事務の一環である市民啓発事業として実施した。
3. 法元寺の美術工芸品調査は、四條畷市史編さん委員会委員・四條畷市文化財保護審議会委員・元大阪大谷大学教授の吉原忠雄氏、四條畷市教育委員会社会教育課主任 村上 始、事務職員 實盛良彦を担当者として、大阪大谷大学常勤講師 田中健一氏、大阪大谷大学学生 山村琴美氏の協力を得て実施した。四條畷市立歴史民俗資料館での歴史講座は、四條畷市立歴史民俗資料館(指定管理者:株式会社日立ビルシステム)からの依頼で、四條畷市教育委員会社会教育課事務職員 實盛良彦を担当者として実施した。(所書はいずれも当時)
4. 法元寺の美術工芸品調査の実施にあたっては、住職の法本豊道氏から多大なる御配慮・御協力を得た。記して感謝の意を表したい。
5. 調査の進行・講座の実施・本書の作成などにあたっては、以下の方々から御指導・御協力を得た。厚く感謝の意を表したい。  
大阪府教育委員会文化財保護課、櫻井敬夫氏(故人)、瀬川芳則氏(元関西外国語大学教授)、三宅久雄氏(元奈良大学教授)、野島 稔氏(四條畷市立歴史民俗資料館館長)、佐野喜美氏(前四條畷市立歴史民俗資料館館長)。(順不同)
6. 本書の執筆は、四條畷市史編さん委員会委員・四條畷市文化財保護審議会委員 吉原忠雄氏・四條畷市教育委員会地域教育課 事務職員 實盛良彦が担当した。文責者はそれぞれの文末に記載している。本書の編集は、四條畷市教育委員会地域教育課 課長代理 村上 始の指導助言のもと、實盛が行った。
7. 調査関連の資料等は四條畷市教育委員会が保管している。

# 本文目次

## 巻頭写真図版

### 例言・目次

第1章 法元寺美術工芸品（彫刻）調査報告	5
第1節 調査の概要	
第2節 調査の成果	
第3節 調査の所見	
第2章 講座記録 邪馬台国と卑弥呼の鏡	35
第1節 魏志倭人伝の国々と四條畷—対馬国から邪馬台国まで—	
第2節 邪馬台国と青銅鏡—弥生時代・古墳時代の鏡—	
第3節 卑弥呼の鏡とその後—三角縁神獸鏡と古墳時代—	

報告書抄録

# 挿図目次

図1 ①薬師如来坐像 全身 正面	23
図2 ①薬師如来坐像 全身 左側面	23
図3 ①薬師如来坐像 厨子扉裏陰刻	24
図4 ②阿弥陀如来立像 全身 正面	24
図5 ②阿弥陀如来立像 全身 左側面	25
図6 ③阿弥陀如来坐像 全身 正面	25
図7 ⑦大日如来坐像 全身 正面	26
図8 ⑦大日如来坐像 光背背面陰刻	26
図9 ⑨十一面観音立像 全身 正面	27
図10 ⑬地藏菩薩立像 全身 正面	27
図11 ⑬地藏菩薩立像 台座銘	28
図12 ⑭地藏菩薩坐像 全身 正面	28
図13 ⑭地藏菩薩坐像 光背身光部表面陰刻	29
図14 ⑭地藏菩薩坐像 光背身光部裏面陰刻	29
図15 ⑮不動明王及び二童子像 全体 正面	30
図16 ⑮不動明王及び二童子像 不動明王立像 全身 正面	30
図17 ⑮不動明王及び二童子像 台座裏墨書	31
図18 ⑯不動明王及び二童子像 全体 正面	31
図19 ⑯不動明王及び二童子像 不動明王立像 全身 正面	32
図20 ⑯不動明王及び二童子像 不動明王台座内側墨書	32

図21	①不動明王坐像 全身 正面	33
図22	①不動明王坐像 像底墨書	33
図23	②弘法大師坐像 全身 正面	34
図24	②弘法大師坐像 牀座右外側陰刻	34
図25	今回取り扱う遺跡の位置(カシミール3Dによる)	36
図26	現在の佐賀県宇木汲田遺跡(末盧国)	37
図27	現在の佐賀県桜馬場遺跡(末盧国)	37
図28	佐賀県茶畑遺跡(末盧国)の復元水田	37
図29	福岡県三雲南小路遺跡(伊都国)	37
図30	福岡県井原鎌溝遺跡推定地	37
図31	現在の福岡県平原遺跡	37
図32	現在の奴国の様子	39
図33	現在の福岡県須玖岡本遺跡	39
図34	現在の須玖岡本遺跡青銅器工房跡	39
図35	現在の福岡県立岩遺跡	39
図36	現在の佐賀県吉野ヶ里遺跡	39
図37	吉野ヶ里遺跡の「王族墓」	39
図38	現在の福岡県吉武高木遺跡	41
図39	現在の島根県西谷墳墓群	41
図40	鳥取県青谷上寺地遺跡の展示館	41
図41	現在の岡山県橋築墳丘墓	41
図42	現在の奈良県纏向遺跡	41
図43	雁屋遺跡出土の播磨(兵庫県)の土器	41

# 第1章 法元寺美術工芸品（彫刻）調査報告

## 第1節 調査の概要

調査寺院	遍照山法元寺（真言宗御室派：四條畷市大字下田原3-1-7）		
調査年月日及び調査者	平成24年	7月31日	吉原忠雄・田中健一（大阪大谷大学常勤講師） 村上始（四條畷市教育委員会）
		8月1日	吉原・田中・村上・實盛良彦（四條畷市教育委員会）
		8月3日	吉原・實盛
		8月4日	吉原・田中・村上・山村琴美（大阪大谷大学学生）

### 調査作品一覧（計測値は全てcm）

名称	員数	像高	材質	時代
① 葉師如来坐像	1 軀	36.7	木造	鎌倉時代
② 阿弥陀如来立像	1 軀	92.7	木造	平安時代
③ 阿弥陀如来坐像	1 軀	43.3	木造	室町時代
④ 阿弥陀如来坐像	1 軀	19.3	木造	江戸時代
⑤ 阿弥陀如来立像	1 軀	47.5	木造	室町～江戸前期
⑥ 阿弥陀如来立像	1 軀	8.2	木造	江戸時代～近代
⑦ 大日如来坐像	1 軀	43.3	木造	江戸時代（寛延3年・1750）
⑧ 大日如来坐像	1 軀	66.2	木造	江戸時代
⑨ 十一面観音立像	1 軀	91.1	木造	平安時代
⑩ 十一面観音立像	1 軀	16.1	木造	近代
⑪ 日光・月光菩薩立像	2 軀	[日光] 62.3 [月光] 62.0	木造	江戸時代
⑫ 地藏菩薩立像	1 軀	31.3	木造	江戸時代以前
⑬ 地藏菩薩立像	1 軀	52.0	木造	江戸時代（享保15年・1730）
⑭ 地藏菩薩坐像	1 軀	58.9	木造	江戸時代
⑮ 不動明王及び二童子像	3 軀	[不動] 80.2 [制多迦] 42.8 [鈴羯羅] 43.1	木造	江戸時代（寛文9年・1669）
⑯ 不動明王及び二童子像	3 軀	[不動] 45.1 [制多迦] 18.9 [鈴羯羅] 18.1	木造	江戸時代（文政7年・1824）大仏師伊兵衛
⑰ 不動明王坐像	1 軀	59.0	木造	江戸時代 大仏師山本要達
⑱ 多聞天立像	1 軀	19.1	木造	江戸時代
⑲ 天部立像	1 軀	20.0	木造	江戸時代
⑳ 阿梨帝母天立像	1 軀	17.1	木造	江戸時代
㉑ 弘法大師坐像	1 軀	28.2	木造	江戸時代（文政10年・1827）
㉒ 弘法大師坐像	1 軀	13.7	木造	江戸時代
㉓ 弘法大師坐像	1 軀	14.0	木造	江戸時代
㉔ 弘法大師坐像	1 軀	25.3	石造	江戸時代か
㉕ 弘法大師坐像	1 軀	46.4	木造	江戸時代
㉖ 弘法大師坐像	1 軀	72.2	木造	江戸時代
㉗ 弘法大師坐像	1 軀	24.1	木造	現代
㉘ 童子坐像	1 軀	17.5	石造	現代

## 第2節 調査の成果

- ① 名称 薬師如来坐像 (図1・2・3)  
員数 1 躯  
時代 鎌倉時代  
作者  
法量 像高36.7 髪際高16.3 頂一顎12.9 面長7.8 面幅8.0 耳張9.5 面奥9.8 胸厚(右)10.8 腹厚12.1 臂張24.7 膝張29.9 膝高(右)5.8 (左)6.6 坐奥21.1  
【光背】長59.7 幅42.7  
形状 螺髪粒状。肉髻珠・白毫相・三道を表す。耳朵環状。內衣、覆肩衣、衲衣、裙を着して両足を包む。右手は屈臂して掌を前にして全指を曲げがちに伸ばし、左手は膝上に掌を上にして薬壺を乗せて全指を曲げる。光背を負い蓮台上に右足を外にして結跏趺坐する。  
品質構造 ヒノキ材。割削ぎ造り。古色。  
頭体幹部は地付きまでを縦一材から彫成し、頭部は耳の後ろを通る線で、体幹部は両肩中央を通る線で前後に割り、内割りの後、襟の線に沿って割り首とする。両肩先に各一材を寄せる。膝前は裳先を含めて横一材製として体部に寄せる。全体に像底から削り(膝前部の深さ2.9センチ)を施す。右手を削ぎ、左手首を袖に差し込む。薬壺を左上に留める。白毫は水晶製。  
保存状態 本来玉眼であったが、後世に手を加えて彫眼のようにしている。肉髻珠は正面の螺髪を大きめに作ってそれとし、その上半分を周囲の螺髪が囲むように配し、肉髻珠の周囲に朱色を塗って表している。  
銘文 (厨子右扉裏陰刻)  
奉建立仕東明山 河州讚良郡西田原村  
岩船宮本地薬師如来御厨子  
元文五庚申年六月八日 施主大坂日野屋地堂氏治右衛門  
取次 神宮寺 祐栄  
伝来 厨子扉裏の銘文から、本像は岩船神社の本地仏と判明する。おそらく明治の廃仏毀釈の折に法元寺へ移安されたのであろう。  
備考 厨子の銘から、この厨子は元文5年(1740)に、大坂商人日野屋(姓は地堂)治右衛門がこの薬師像安置のために、建立したことがわかる。取り次いだのは神宮寺(岩船宮の神宮寺か)の僧である祐栄である。そして元文5年当時、岩船神社の所在地は西田原村であった。
- ② 名称 阿弥陀如来立像 (図4・5)  
員数 1 躯  
時代 平安時代  
作者  
法量 像高92.7 髪際高84.0 頂一顎22.1 面長11.6 面幅11.1 耳張14.2 面奥16.9 胸厚(左)14.2 腹厚16.9 臂張28.8 袖張25.2 裾張24.4 足先開(外)18.2(内)12.8 柄長3.4 幅2.0  
【台座】高40.6 幅51.0 奥行42.8 【光背】高121.0 幅57.5  
形状 螺髪粒状。肉髻珠・白毫・三道を表す。耳朵貫通。衲衣を偏袒右肩に着し、覆肩衣を着ける。着した裙を蓮台上に垂らす。両手屈臂して、右手は掌を前にして第一・二指を捻じ、左手は掌を内に向けて第一・二指を捻ずる。透かし彫りの舟形光背を負い蓮台上に立つ。  
品質構造 材不明。一木造り。古色。彫眼。

- 頭頂から地付きまで両手首までを含んで縦一材から彫出する。これに両手先・足先を寄せ、像底から台座上の丸柄を入れる。肉髻珠・白毫（いずれも水晶製）
- 保存状態** 肉髻珠、白毫、両手先・足先は後補。顔を初め、彫直しがある。右耳朶、腹部と両足間の一部などに欠損がある。丸柄、古色は新補。
- 銘文**
- 伝来**
- 備考** 現在は阿弥陀如来像として信仰されているが、両手先は後補なので本来の尊名は不明である。
- ③ **名称** 阿弥陀如来坐像（図6）
- 員数** 1 軀
- 時代** 室町時代
- 作者**
- 法量** 総高 71.7 像高 43.3 髮際高 36.8 頂一顎 15.5 面長 9.2 面幅 9.0 耳張 10.6 面奥 11.0 胸厚（右）12.6 腹厚 14.0 臂張 27.2 膝張 36.7 膝高（右）6.8（左）6.5 坐奥 24.0 【台座】前高 26.7 後高 28.8 幅 41.7 奥行 31.7 【光背】長 44.4 幅 19.5
- 形状** 螺旋粒状。肉髻珠・白毫相・三道を表す。耳朶環状。衲衣を偏袒右肩に着し、その端が右肩を覆う。裙を着す。両足後部は布が覆う。両手を腹前にして弥陀定印（各第一・二指を捻じる）を結び、輪光背を負って湧雲付きの蓮台上に右足を外にして結跏趺坐する。
- 品質構造** ヒノキ材。寄木造り。肉身金泥・衣部古色。玉眼嵌入。頭部の構造は不明。体幹部は前後三材刳ぎ。体側各二材を寄せ、膝前横一材を寄せる。内刳りを施す。肉髻珠・白毫（いずれも水晶製）。
- 保存状態** 裳先亡失。
- 銘文**
- 伝来**
- 備考**
- ④ **名称** 阿弥陀如来坐像
- 員数** 1 軀
- 時代** 江戸時代
- 作者**
- 法量** 総高 48.9 像高 19.3 髮際高 16.4 頂一顎 7.4 面長 4.0 面幅 4.4 耳張 5.1 面奥 6.0 胸厚（左）5.6 腹厚 6.4（含袈裟）臂張 13.0 膝張 16.5 膝高（右）3.2（左）3.4 坐奥 11.6 【台座】高 30.0 幅 25.7 奥行 21.1 【光背】高 32.7 幅 23.4
- 形状** 螺旋粒状。肉髻珠・白毫相・三道を表す。耳朶不貫。衲衣を偏袒右肩に着し、その端が右肩を覆う。裙を着すが、それが左足裏後部を覆う。右手は屈臂して掌の前にして第一・二指を捻じ、左手は膝上に掌を上にして第一・二指を捻じ、光背を負い蓮台上に左足を外にして結跏趺坐する。
- 品質構造** 針葉樹材。割刳ぎ造り。肉身金泥・衣部漆箔。玉眼嵌入。頭部は耳後ろを通る線、体幹部は肩の中央辺りで割り短く。割り首の後、像底の一部を残して内刳りを施す。両肩先材を寄せる。膝前は裳先を含めて横一材製として体部に寄せる。肉髻珠・白毫（いずれも水晶製）
- 保存状態** 左手先後補。
- 銘文**
- 伝来**
- 備考**

- ⑤ 名称 阿弥陀如来立像  
 員数 1 軀  
 時代 室町～江戸前期  
 作者  
 法量 総高78.5 像高47.5 髮際高44.0 頂一顎8.8 面長5.4 面幅5.5 耳張6.4 面奥6.4 胸厚(左)6.0 腹厚7.3 臂張15.0 袖張12.9 裾張9.6 足先開(外)7.1(内)2.4 柄長(右)高2.4 幅0.7 奥行2.2(左)高2.3 幅0.9 奥行2.4  
 【台座】高30.4 【光背】高62.0 幅35.7  
 形状 螺旋粒状。肉髻珠・白毫相・三道を表す。耳朵不貫。衲衣を偏袒右肩に着し覆肩衣を着ける。裙を着す。右手は屈臂して体前で錫杖を持ち、左手は軽く垂下して掌を前にして第一・二指を捻じ、笠後光を負い蓮台上に直立する。  
 品質構造 材不明。一木造りか。肉身金泥・衣部古色。玉眼嵌入。  
 肉髻珠・白毫(いずれも水晶製)  
 保存状態 右手・錫杖・肉身部の金泥・衣部の古色などは新補。  
 銘文  
 伝来  
 備考
- ⑥ 名称 阿弥陀如来立像  
 員数 1 軀  
 時代 江戸時代～近代  
 作者  
 法量 像高8.2  
 形状 螺旋粒状・肉髻珠・白毫相を表さず。三道を表す。耳朵不貫。衲衣を通肩に着する。裙を着す。右手は屈臂する。左手は軽く垂下して掌を前にして第一・二指を捻じ。  
 品質構造 針葉樹材。一木造り。素地仕上げ。彫眼。  
 保存状態 蓮台・光背を欠く。右前脚部欠損。両足先欠損。  
 銘文  
 伝来  
 備考 本像は高さ16.0cmの厨子内に安置されている。厨子内は金箔地に宝相華文様で埋め、向かって右扉裏に蓮台を捧げた観音立像、左扉裏に合掌の勢至立像の雲上来迎を描く。
- ⑦ 名称 大日如来坐像(図7・8)  
 員数 1 軀  
 時代 江戸時代(寛延3年・1750)  
 作者  
 法量 総高98.1 像高60.0 髮際高46.2 頂一顎24.1 面長10.6 面幅10.8 耳張13.8 面奥14.1 胸厚(右)14.5 腹厚20.0 臂張30.3 膝張44.7 膝高(右)9.3(左)9.2 坐奥30.6  
 【納】高1.5 幅10.5 奥行10.0  
 【光背】長106.0 幅78.0 【台座】高40.0 幅63.0 奥行51.0  
 形状 高髻を結び、天冠台を表し、髪に毛筋を刻む。宝冠を被る。白毫・三道を表す。耳朵環状。糸帛を懸けて裙(折り返付き)、腰布を着け、両手を胸前にして習拳印を結び、右足を外にして結跏趺坐する。胸飾、臂釧、腕釧を付ける。  
 品質構造 材不明。寄木造り。全身漆箔か。玉眼嵌入。  
 白毫は水晶製。宝冠・胸飾は銅製。  
 保存状態

銘文	(光背裏面陰刻) 寛延三庚午六月	最譽壽性信女 智観道空禪定門 利覚妙空禪定門 随芳妙意禪定尼 覚譽壽西禪定門 利伯妙恵(?)禪定尼 教善宗清禪定門 照譽光月信士 光玉譽智明信女 教譽壽直信尼(?) 空窓智了信女 了譽光殘法師 浄安禪定門 宗恵禪定門 岳譽祥雲信士 一家一切諸聖靈
	施主大坂	日野屋治右衛門 大坂屋源兵衛
伝来 備考		
⑧ 名称	大日如来坐像	
員数	1 軀	
時代	江戸時代	
作者		
法量	像高 66.2 髪際高 48.9 頂一顎 29.1 面長 11.7 面幅 11.4 耳張 13.3 面奥 15.2 胸厚(右) 15.4 臂張 36.7 袖張 17.2 (含条帛) 膝張 44.2 膝高(右) 8.7 (左) 8.2 坐奥 32.8	
形状	高髻を結び、天冠台を表し、髪に毛筋を刻む。宝冠を被る。白毫・三道を表す。耳朶環状。条帛を懸けて裙(折り返付き)、腰布を着け、両手を胸前にして智拳印を結び、右足を外にして結跏趺坐する。胸飾、臂釧・腕釧を付ける。	
品質構造	材不明。寄木造り。肉身金泥・衣部漆箔。玉眼嵌入。 頭部は耳後ろを通る線で前後二材別ぎ、体幹部は何材別ぎか不明。両腰脇各一材。全体に内割りを施す。両脚部一材(内割りあり)を寄せ、裳先を短く。像底布漆張。白毫は水晶製。宝冠・胸飾は銅製。	
保存状態	条帛の右腰部下端欠損。	
銘文		
伝来		
備考	本寺の本尊。台座は不安定なため、移動せず。	
⑨ 名称	十一面観音立像(図9)	
員数	1 軀	
時代	平安時代	
作者		
法量	総高 132.0 像高 91.1 髪際高 74.9 頂一顎(髻頂まで) 20.0 面長 10.3 面幅 9.9 耳張 11.4 面奥 13.4 胸厚(右) 11.3 腹厚(含条帛) 13.5 臂張 27.4 裾張 24.6 足先開(外) 12.1 (内) 4.2	

	【納〔一本〕】長5.7幅3.5奥行3.0 【光背】長108.7幅51.2【台座】高40.1幅50.2奥行40.6
形状	高髻を結って頭上に十一面をいただし、天冠台を表し、髪に毛筋を刻む。宝冠を被る。白毫・三道を表す。耳朵環状。 条帛を懸けて裙（折り返付き）を着け、右手を垂下して掌を前にして五指を伸べ、左手は屈臂して胸前で水瓶を執り、蓮台上にほぼ直立する。胸飾、腕釧を付ける。
品質構造	材質不明。一木造り。古色。彫眼。
保存状態	高髻別材。頭上面別材製。面部を割削いでいる。内刺りはない模様。両手先、両足先は別材を削ぎ付ける。白毫は水晶製。宝冠・胸飾は銅製。
銘文	顔を初めとして、大きく彫り直している模様。下半身前面も彫り直しているため、服制に辻褄が合わない点も見られる。高髻、頭上面、天衣の両前膊から垂加する部分、両手先、両足先、全身の漆箔・朱漆部、白毫、水瓶、宝冠、胸飾は後補。背面裾近くに節穴かと思われる穴（5.3×7.0深さ1.6）がある。
伝来	
備考	全面的な改変により、把握しにくいのが、平安時代10世紀ころの作品である。
⑩ 名称	十一面観音立像
員数	1 軀
時代	近代
作者	
法量	像高16.1 髪際高13.6【厨子】高33.0
形状	頭上面をいただし、宝冠を被る。白毫・三道を表す。 条帛を懸けて裙（折り返付き）を着け、舟形光背を負い、蓮台上にほぼ直立する。胸飾を付ける。
品質構造	材質不明。構造不明。全身金泥か。彫眼か。
保存状態	頭上面まばら彫。両臂先・両足先は別材削ぎ。白毫は水晶製。宝冠・胸飾は銅製。
銘文	両臂先、左足先亡失。 （観音像背面墨書）玉□□□ （光背裏墨書）天人玉 （厨子）梵字（バン）東寺
伝来	東寺に関係するものか。
備考	
⑪ 名称	日光・月光菩薩立像
員数	2 軀
時代	江戸時代
作者	
法量	【日光】 総高98.0 像高62.3 髪際高53.8 頂一顎（髻頂まで）15.5 面長6.8 面幅6.1 耳張7.9 面奥8.5 胸厚（右）7.5 腹厚7.7 臂張16.6 裾張12.2 足先開（外）10.3（内）5.2 【光背】 長80.2 幅59.9【台座】高44.2 幅38.4 奥行24.5 【月光】 総高97.8 像高62.0 髪際高53.3 頂一顎15.1 面長6.2 面幅5.8 耳張7.1 面奥7.4 胸厚（右）7.1 腹厚7.3 臂張16.1 裾張11.1 足先開（外）10.2（内）5.4 【光背】 長83.2 幅61.0【台座】高48.6 幅39.0 奥行24.0

形状	【日光】 やや高め垂鬘を結う。粗い毛筋を刻む。天冠台に宝冠を載せる。白毫・三道を表す。耳朵環状。条帛を懸けて裙(折り返付き)、腰布を着け、両肩から両腕、両脚側へと天衣をたらし、右手は軽く垂下して掌を前に向けて五指を曲げ、左手は屈臂し掌を内に向けて第二指以外を曲げて日象(蓮台・茎付)を執り、光条付の輪光背を負って、岩座(櫃座付)上の蓮台にやや腰を曲げて立つ。胸飾、胸釧を付ける。
	【月光】 左右手を日光菩薩像とは逆にすること、持物が月象であることが、日光菩薩像とは異なる。その他は日光菩薩像と同じ。
品質構造	【日光】 材不明。構造不明。肉身金泥・衣部漆箔。玉眼嵌入。 垂鬘別材。内刺りは深い模様。天衣の両体側に垂下する部分は別材を腕に釘留め。白毫は水晶製。宝冠・胸飾は銅製。
	【月光】 日光菩薩像と同じ。
保存状態	【日光】 胸飾の環珞は新補。
	【月光】 胸飾の環珞は新補。右手の天衣垂下部外れている。
銘文	
伝来	
備考	①葉師如来坐像の両脇侍像。
⑫ 名称	地藏菩薩立像
員数	1 軀
時代	江戸時代以前
作者	
法量	総高 89.3 像高 31.3 【厨子】 高 47.3
形状	円頂。三道を表す。耳朵環状。袈衣、覆肩衣、裙を着する。右手は軽く曲げて垂下し、掌を前にして五指を伸ばす。左手は屈臂して腹前で掌の上に宝珠を載せる。輪光背(宝珠三付き)を負って少し左に腰を捻り、右足を遊ばせて蓮台上に立つ。
品質構造	材不明。一本造りか。古色。彫眼。 構造は不明。
保存状態	
銘文	
伝来	
備考	本体、台座を厨子に接着しており、取り出すことが出来ないため、不十分な調査になったが、着衣や書履の形式が古く、顔立ちが厳しいところに古い要素が見られる。要検討。
⑬ 名称	地藏菩薩立像(図10・11)
員数	1 軀
時代	江戸時代(享保15年・1730)
作者	
法量	総高 82.0 像高 52.0 頂一顎 9.2 面幅 6.5 耳張 7.2 面奥 7.5 胸厚(左) 8.8 臂張 17.8 袖張 15.2 裾張 12.3 足先開(外) 9.0(内) 5.5 柄長(右) 2.9(左) 3.0 【錫杖】 長 52.3 幅 3.3 【台座】 高 30.0 幅 31.0 奥行 24.8 【光背】 長 62.1 幅 21.8
形状	円頂。白毫・三道を表す。耳朵環状。內衣、覆肩衣、袈裟、裙を着する。右手は軽く曲げて垂下し、錫杖を執る。左手は屈臂して掌の上に宝珠を載せる。輪光背(宝珠三付)を負って少し左に腰を捻り、右足を遊ばせて蓮台上に立つ。
品質構造	材不明。割矧ぎ造りか。肉身金泥・衣部彩色・金箔。玉眼嵌入。

- 頭部の構造は不明。体幹部は両足後ろを通る線で前後に割り短く。両肩先に別材を寄せる。両手先・足先材を寄せる。内割りを施す。足裏から別材製の柄を差し込む。白毫は水晶製。
- 保存状態** 左第二指第二関節から先欠失。
- 銘文** (台座框座内墨書)  
施主瀧寺村甚六同弥平次 享保十五庚戌年 三月五日住持實栄代
- 伝来備考** 法元寺伝来と推定される。  
瀧寺は下田原の4字地(片田、瀧寺、野田、照涌)の一つ。したがって、住持實栄は法元寺の住持の可能性がある。
- ⑭ **名称** 地藏菩薩坐像 (図12・13・14)
- 員数** 1 軀
- 時代** 江戸時代
- 作者**
- 法量** 総高 86.0 像高 58.9 頂-顎 20.7 面幅 14.3 耳張 15.4 面奥 15.8 胸厚 (左) 19.0 臂張 40.8 袖張 52.0 膝張 52.3 膝高 (右) 10.2 (左) 10.3 坐奥 34.8
- 形状** 【錫杖】長 66.8 (現状) 【台座】高 26.8 幅 63.0 奥行 50.4 【光背】長 99.5 幅 71.7 円頂。白毫・三道を表す。耳朶環状。內衣、覆肩衣、袈裟、裙を着する。胸飾を付ける。両手屈臂して右手は錫杖を執り、左手は掌の上に宝珠を載せる。舟形光背を負い、右足を外にして結跏趺坐して大仏座(框座あり)上に坐す。
- 品質構造** 材不明。割短ぎ造りか。彩色仕上げ。玉眼嵌入。  
頭部は耳前を通る線に短目。体幹部は前後二材か。両肩先に各一材を寄せる。左膝奥に三各材を寄せる。両手前膊衣部を短ぎ、両手を袖口に差し込む。内割りを施す。衣部に盛り上げ文様を施す。白毫は水晶製。胸飾は銅製。錫杖は輪(銅製)以外は木製。宝珠は木造漆箔。
- 保存状態**
- 銘文** (光背身光部正面陰刻) 享保十二丁未年九月廿四日  
光誉浄譚禪定門  
享保十乙巳年五月十日  
心誉壽譚禪定尼  
(同 背面陰刻) 河州下田原村  
正福寺  
施主大坂久宝寺町住人
- 伝来備考** 下田原村の正福寺伝来。  
制作期は、享保12年(1727)以後、近い頃と推定される。下田原には現在法元寺一寺のみであるが、正福寺も存在したことを示す唯一の資料である。
- ⑮ **名称** 不動明王及び二童子像 (図15・16・17)
- 員数** 3 軀
- 時代** 江戸時代(寛文9年・1669)
- 作者**
- 法量** [不動] 総高 99.5 像高 80.2 髮際高 75.0 頂-顎 14.8 面長 9.1 面幅 9.7 耳張 11.6 面奥 11.7 胸厚 (右) 11.5 腹厚 12.6 臂張 34.3 裾張 26.4 足先開 (内) 5.7 (外) 14.4 納長 (右) 高 3.7 幅 0.8 奥行 3.8 (左) 高 3.5 幅 0.8 奥行 4.2  
[制多迦] 総高 52.5 像高 42.8 髮際高 40.2 頂-顎 8.5 面長 5.5 面幅 6.6 耳張 6.9 面奥 7.6 胸厚 (右) 9.1 腹厚 9.1 臂張 23.2 裾張 16.3 足先開 (内) 6.0 (外) 11.1

	〔矜羯羅〕	總高 52.8 像高 43.1 髮際高 41.7 頂一顎 8.8 面長 6.6 面幅 6.1 耳張 7.3 面奥 7.9 胸厚 (右) 8.8 (含髮) 腹厚 8.3 臂張 18.6 裾張 15.6 足先開 (内) 5.4 (外) 9.5
形状	【台座】	高 8.6 幅 40.6 奥行 16.3 【光背】 高 50.3 幅厚 19.6
	〔不動〕	頭頂に蓮華を載せ、頭部全面を巻髪として前頭部に花飾を付ける。左肩に振りながら辮髪を垂れる。額に水波相を表して、正眼とし、狗牙を両口端から上下に出す。三道を表し、条帛を懸ける。裙は正面で右前に打ち合わせ、上端を折り返す。腰帯を着けて正面で結び、紐を垂らす。両手を屈臂して右手で三鈷柄の剣を胸前に構え、左手で綱索を執り、腕釧・臂釧を付けて、右に腰を捻り、左足を遊ばせて、火炎光背を負い、岩座上に立つ。
	〔制多迦〕	頭髮は巻髪として後頭部にも垂らし、肩衣を懸ける。右手は軽く屈臂して垂下し、持物を握る。左手は側方にかけて屈臂し、掌を内にして五指を伸ばす。裙は右前にして打ち合わせ、上端を折り返す。腰帯を結び、腕釧・臂釧・足釧を付けて体勢を右斜め前にし、岩座上にほぼ直立する。
	〔矜羯羅〕	総髪を背後に垂らして条帛を懸け、裙は右前にして打ち合わせ、上端を折り返す。腰帯を結び、腕釧・臂釧・足釧を付けて合掌し、岩座上に直立する。
品質構造	〔不動〕	ヒノキ材か。割矧ぎ造りか。彩色仕上げ。玉眼嵌入。頭部は頂蓮から推定して、頬を通る線と耳前を通る線で矧いでいる。体部の構造不明。両足先を寄せる。足納は足裏から差込む。彩色の上から一部切金文様を施す。
	〔制多迦〕	材質・構造不明。彩色仕上げ。玉眼嵌入。彩色の上から一部切金文様を施す。
	〔矜羯羅〕	材質・構造不明。彩色仕上げ。玉眼嵌入。彩色の上から一部切金文様を施す。
保存状態	〔不動〕	
	〔制多迦〕	右手の持物亡失、左手第二指付け根から折損。
	〔矜羯羅〕	
銘文	(不動明王台座下框座天板裏面墨書)	
	河州西田原村	
	寛文九年丁酉五月廿一日 法元寺上之坊 住僧良識実清	
伝来	寛文9年5月21日に法元寺上之坊の住僧良識実清が、台座に墨書銘文をしたためている。ほぼこの時を制作期と考えることが出来、以来、本寺に伝来した作品とわかる。	
備考	法元寺は現在、下田原に所在しているが、銘文によると当時は下田原といわず、西田原と称していたことがわかる。	
⑬ 名称	不動明王及び二童子像 (図 18・19・20)	
員数	3 軀	
時代	江戸時代 (文政7年・1824)	
作者	大仏師伊兵衛	
法量	〔不動〕 總高 54.3 像高 45.1 髮際高 36.4 頂一顎 7.6 面長 5.2 面幅 4.6 耳張 5.3 面奥 6.7 胸厚 (右) 6.5 腹厚 (含条帛) 7.4 臂張 14.7 裾張 7.7 足先開 (内) 3.6 (外) 7.1 納長 (右) 高 2.5 幅 1.0 奥行 3.2 (左) 高 2.4 幅 1.1 奥行 3.2	

	[制多迦] 總高 23.7 像高 18.9
	[矜羯羅] 總高 23.6 像高 18.4
	【台座】高 8.6 幅 40.6 奥行 16.3 【光背】高 50.3 幅厚 19.6
形状	[不動] 頭頂に蓮華を載せ、頭部全面を巻髪として前頭部に花飾を付ける。左肩に振りながら辮髪を垂れる。額に水波相を表して、天地眼とし、狗牙を両口端から上下に出す。三道を表し、条帛を懸ける。裙は正面で右前に打ち合わせ、上端を折り返す。腰布を結び、右手を屈臂して三鈷柄の剣を胸前に構え、左手は軽く垂下して綱索を執り、腕釧・臂釧を付けて、右に腰を捻り、左足を遊ばせて、火炎光背を負い、岩座上に立つ。
	[制多迦] 髪を後頭部に回し、肩衣を懸け右手は垂下して宝棒を前後に水平に持ち、左手は屈臂して腹前で肩衣を掴む。裙は正面で右前に打ち合わせ、上端を折り返す。腰布を結び、腕釧・臂釧を付けて右に腰を捻り、左足を遊ばせて岩座上に立つ。
	[矜羯羅] 髪を背後に垂らして条帛を懸ける。裙は正面で右前に打ち合わせ、上端を折り返す。腰布を結び、腕釧・臂釧を付けて合掌し、岩座上に直立する。
品質構造	[不動] 材不明。一木造り。彫眼。古色仕上げ。両肩先で短く。内割りなし。
	[制多迦] 材不明。体幹部は前後二材別ぎ。頬を通る線に短ぎ目。玉眼嵌入。彩色仕上げ。
	[矜羯羅] 材不明。体幹部は前後二材別ぎ。頬を通る線に短ぎ目。玉眼嵌入。彩色仕上げ。
保存状態	[不動] 眼、口、牙の彩色は後補。綱索は新補。
	[制多迦] 諸所の顔料が剥落している。
	[矜羯羅] 鼻先欠損。
銘文	(台座框座天板裏面墨書) 文政七申 佛 京之住人大師伊兵衛 正月吉日 為萩原村ニ而
伝来 備考	萩原村は現在の生駒市萩原町と思われる。同町所在の廃寺などからの移安か。
⑪ 名称	不動明王坐像 (図 21・22)
員数	1 軀
時代	江戸時代
作者	
法量	像高 59.0 髮際高 53.8 頂一顎 19.2 面長 11.4 面幅 13.7 耳張 15.2 面奥 15.5 胸厚(右) 17.6 腹厚 20.5 臂張 44.3 膝張 53.5 膝高(右) 10.0 (左) 10.8 坐奥 37.0
	【劍】長 33.0 幅 2.9
形状	頭頂に蓮華を載せ、頭部全面を巻髪として前頭部に花飾を付ける。左肩に振りながら辮髪を垂れる。額に水波相を表して、正眼とし、狗牙を両口端から上下に出す。耳朶貫通。三道を表し、条帛を懸ける。裙は上端を折り返す。腰布を着ける。両手を屈臂して右手で三鈷柄の剣を胸前に構え、左手は掌を上にして綱索を執り、腕釧・臂釧を付けて、右足を外にして結跏趺坐する。左足後部を裙で包む。
品質構造	材不明。奇木造りか。彩色仕上げ。玉眼嵌入。 頭部は頂蓮から推定して、頬を通る線と耳前を通る線に短ぎ目。体幹部は前後三材別ぎ。両肩先材を寄せる。両腰脇に三各材を寄せる。両脚部は横材だが、何材かは不明。
保存状態	綱索後補。像底を初めとする彩色の一部。

- 銘文 (像底板裏面墨書)  
 再建  
 城州八幡柴座口(町か)  
 大佛師  
 山本要達作
- 伝来  
 備考 銘文によると、岩清水八幡宮の大佛師山本要達が再建したものであるが、再建がどのような意味であるかは検討課題である。
- ⑩ 名称 多聞天立像  
 員数 1 軀  
 時代 江戸時代  
 作者  
 法量 総高 31.1 像高 19.1 髮際高 17.5  
 【台座】高 12.6 幅 13.5 奥行 12.4  
 形状 兜を被り、閉口して上方を睨む。大袖の衣、袴袖の衣、裙を着け、袴をはく。襟甲、肩甲、胸甲、腰甲、前橋を着ける。胸部下方に布を巻く。腹部を締め、天衣をからめる。右手を側頭に上げ、左手は前方へ屈臂する。沓を履いて岩座上の邪鬼の上に立つ。  
 品質構造 ヒノキ材。一木造りか。古色仕上げ。玉眼嵌入。  
 頬を通る線に矧ぎ目。右肩に矧ぎ目。  
 保存状態 右肩から先と左臂から先を欠失。持物亡失。邪鬼の左足亡失。  
 銘文 (台座地付部墨書)  
 左い地(?)  
 □□
- 伝来  
 備考 姿形から多聞天と判断される。
- ⑪ 名称 天部立像  
 員数 1 軀  
 時代 江戸時代  
 作者  
 法量 総高 32.4 像高 20.0 髮際高 19.0  
 【台座】高 14.8 幅 13.6 奥行 11.5  
 形状 小髷を結び、天冠台を表し、髪に毛筋を刻む。開口して正面する。大袖の衣、袴袖の衣、裙を着け、袴をはく。襟甲、肩甲、胸甲、腰甲、前橋を着ける。胸部下方に布を巻く。腹部を締め、天衣をからめる。右手を斜め側頭に上げて持物を取り、左手は腰に当てる。沓を履いて岩座上の邪鬼の上に立つ。  
 品質構造 ヒノキ材。一木造りか。古色仕上げ。玉眼嵌入。  
 頬を通る線に矧ぎ目。右肩、裙の左方に矧ぎ目。左袖に別材を矧ぐ。  
 保存状態 持物亡失。邪鬼の左臂から先と左膝から先を亡失。右臂の別材矧ぎ付け部亡失。邪鬼の左足亡失。台座框座は新補。  
 銘文  
 伝来  
 備考 ⑩多聞天立像とほぼ同高、同仕上げ、同作風から⑩・⑪は一揃いのもので、須弥壇上に置かれた持国天・多聞天の二天像と推定される。



- ⑬ 名称 弘法大師坐像  
 員数 1 軀  
 時代 江戸時代  
 作者  
 法量 像高 14.0  
 形状 円頂で衣の上に袈裟を懸け、左手は膝上に置いて念珠を握り、右手は胸前で掌を上に向けて五結杵を執り結跏趺坐する。  
 品質構造 材不明。一木造り。彩色仕上げ。彫眼。  
 頭体幹部は一材製で、両袖部・左手先・五結杵は別材。  
 保存状態 数珠・左袖部亡失。  
 銘文 (両脚地付部墨書)  
 四寸風鉢  
 佛二寸  
 伝来  
 備考 現在、古色を呈しているが、本来彩色仕上げ。
- ⑭ 名称 弘法大師坐像  
 員数 1 軀  
 時代 江戸時代か  
 作者  
 法量 総高 32.0 像高 25.3  
 【台座】高 6.7 奥 19.9 幅 19.7  
 形状 円頂で衣の上に袈裟を懸け、左手は膝上に置いて念珠を握り、右手は胸前で掌を上に向けて五結杵（独結杵に見える）を執り、畳座上に結跏趺坐する。  
 品質構造 石造。砂岩か。本体・台座を共彫。彫眼。  
 眉、臉の上下、黒目のみ墨で描く。  
 保存状態  
 銘文  
 伝来  
 備考 水瓶・香を台座前面に陰刻。
- ⑮ 名称 弘法大師坐像  
 員数 1 軀  
 時代 江戸時代  
 作者  
 法量 総高 89.4 像高 46.4 頂-顎 16.6 面幅 10.8 耳張 11.6 面奥 13.9 胸厚 (右) 14.1 (含衣) 腹厚 17.5 臂張 32.4 膝高 (右) 7.7 (左) 7.9 坐奥 30.8  
 形状 円頂で衣の上に袈裟を懸け、左手は膝上に置いて念珠を握り、右手は胸前で掌を外に向けて五結杵を執り、牀座上に結跏趺坐する。  
 品質構造 材不明。寄木造り。彩色仕上げ。玉眼嵌入。  
 頭部の構造不明。体幹部は前後二材繋ぎ。両肩先材を寄せ、その外に各一材を寄せる。膝前横一材、裳先を短く。内列りを施して底板を張り、布漆張とする。  
 保存状態 彩色新補。右手掌は上に向けるべき。修理時に外に向けたと思われる。  
 銘文  
 伝来  
 備考 近年、全面的に彩色を新しくした。

- ②⑥ 名称 弘法大師坐像  
 員数 1 軀  
 時代 江戸時代  
 作者  
 法量 像高 72.2 頂一顎 14.1 面幅 9.4 耳張 10.5 面奥 10.5 腹厚 16.7 臂張 29.1 膝張 37.8  
 膝高(右) 7.0 (左) 8.0 坐奥 26.1  
 形状 円頂で衣の上に袈裟を懸け、左手は膝上に置いて念珠を握り、右手は胸前で掌を外  
 に向けて五結杵を執り、牀座上に結跏趺坐する。  
 品質構造 スギ材か。寄木造り。彩色仕上げ。玉眼嵌入。  
 頬を通る線に刻ぎ目。体幹部は両肩中央を通る線で前後二材刻ぎ。両肩先材(各前  
 後二材)を寄せ、胸前を通る線に刻ぎ目。膝前横一材を刻ぐ。内割りをして底板  
 (盖板)を張る。  
 保存状態 右袖・裾部(別材製)亡失。数珠、壘座・牀座新補。底板新補。  
 銘文  
 伝来  
 備考
- ②⑦ 名称 弘法大師坐像  
 員数 1 軀  
 時代 現代  
 作者  
 法量 総高 40.2 像高 24.1  
 形状 円頂で衣の上に袈裟を懸け、左手は膝上に置いて念珠を握り、右手は胸前で掌を上  
 に向けて五結杵を執り、牀座上の壘座に結跏趺坐する。  
 品質構造 材不明。割刻ぎ造り。彩色仕上げ。玉眼嵌入。  
 頭部の構造不明。体幹部は左右刻ぎ。両脚部は左右に三材刻ぎ。  
 保存状態  
 銘文  
 伝来  
 備考 近年の制作。
- ②⑧ 名称 童子坐像  
 員数 1 軀  
 時代 現代  
 作者  
 法量 総高 20.7 像高 17.5 髪際高 16.3  
 形状 頭髪を左右に分けて角髪を結った上に垂髪とする。袍と袴を着して右手を膝上に伏  
 せて、左手を屈臂して拳を握り、礼盤上に坐す。  
 品質構造 石造。一材か。彩色仕上げ。彫眼。  
 保存状態  
 銘文  
 伝来  
 備考 聖徳太子像か。

### 第3節 調査の所見

今回の仏像彫刻調査は全28件33軀で、内訳は薬師如来像1件1軀、阿彌陀如来像5件5軀、大日如来像2件2軀、十一面観音像2件2軀、日光・月光菩薩像1件2軀、地藏菩薩像3件3軀、不動三尊像2件6軀、不動明王像1件1軀、多聞天像1件1軀、天部立像1件1軀、詞梨帝母天立像1件1軀、弘法大師像7件7軀、童子像1件1軀である。本寺は真言宗仁和寺末なので、密教関係の像が多いが、なかでも弘法大師像が7軀で、全体の25%を占める。これらは、廃寺などから移安されたものも多い。

本寺本来の仏像についてはより詳細な検討を要する。

2例(②弘法大師坐像・③童子坐像 [いずれも石造])を除いてすべて木造で、ヒノキ材とわかるものもあるが、材質が不明なものが多い。構造も制作の時代が江戸時代以後のものも多く、したがって損傷が少ないために、外見から構造を判断できるものがそう多くはない。仕上げは、素地、古色、金泥・漆箔、彩色と多彩である。玉眼はある程度の大きさの像に施され、小像と古像には影眼が施されている。

制作期を見ると、②阿彌陀如来立像が最古で、量感豊かな一本造りの作品である。平安後期10世紀末～11世紀初めと推定される。残念ながら長年月による風化と後世の修理が著しい。この像は客仏で、本尊から左方向へ離れて安置されている。そしてこれより古いかもしれない、改変の多い③十一面観音立像がある。ついで、①薬師如来坐像が鎌倉時代の作である。意志的な表情と写実的な表現に優れている。これも風化が残念である。室町時代以後の作品は多いが、美術的な評価は今のところ難しい。

何しろ全国には7万5000以上の寺院があり、一寺院に一体以上の仏像があるから、全国には膨大な数の仏像が存在するわけで、その他、社堂とか集会所そして博物館・美術館・資料館などの仏像を寄せると思像もつかない数になりそうである。ほとんどが江戸時代の作品といわれており、その中から美術的に優れた仏像を選ぶのはきわめて困難である。また、仏像研究は古い時代のものから進められており、室町以後の研究はまだ十分に進んでいるようには見えない。そのような理由から、本寺の仏像の美術的な評価はここでは控えておきたい。

とは言うものの、室町時代以後の仏像で今回の成果は、仏像あるいは関係資料に銘文をしたためたものが比較的多かったことである。銘文は28件のうち11件に見られた。なかには判読不可能なものや戯書のようなものもあったが、仏像の制作期や修理期、造立の事情や関わった施主・願主・仏師、本来の安置場所などが記されているものもあり、地元にとっての貴重な歴史資料となった。

なかでも、①薬師如来坐像は鎌倉時代後期の作であるが、後世の厨子の扉銘から岩船神社の本地仏であることが判明していた。おそらく明治の廃仏毀釈時に法元寺に移安されてきたと思われる。その銘中に岩船神社が西田原村に所在すると記されていることも興味深い。西田原村は交野川を挟んで奈良県側を東田原村というのに対する名称である。西田原村は慶安4年(1651)に上田原村と下田原村にそれぞれ村方三役を置く独立村落になった。薬師如来坐像の厨子扉裏銘の元文5年(1740)においても、なお西田原村の意識が強く残っていたのである。しかし西田原村には岩船神社はない、と現在は考えられている。はたしてそうであろうか。天保15年(1844)の『上田原差出明細帳』にも岩船神社の名称はない。しかし、同帳「社五ヶ所 除地 上田原村下田原村立会 氏神住吉大明神社 別当神宮寺」の記事に注目したい。氏神は産土神のごとて、住吉明神は交野川流域の随所に祀られている。住吉明神は本来は交野市盤船神社(法元寺薬師如来坐像扉銘の岩船神社の岩は、磐船神社の磐[イワ]の音通から用いられたのであろう)に遅れてともに祀られるようになったものである。時代の下降にしたがって住吉明神が表に出てきたのであろう。本来は盤船神が主神なのである。その証拠に、岩船神社の本地薬師如来坐像の厨子の中に4枚の住吉明神の本地仏板絵が納められていた。そして分村以前から西田原村の産土神であり、上田原村と下田原村が立ち会っていたから、分村以前の西田原村という名称を用いたのであろう。元文5年(1740)から天保15年(1844)の間に岩船宮から現住吉神社へと名称が変化しているのは、住吉神の農耕守護に対する信仰がより強くなった結果であろうか。なお、⑤不動明王及び二童子像(寛文9年・1669)にも西田原村の名称が記されているが、これは公文書ではない私的な信仰のための記銘であり、分村後20年末満のころなので、まだ西田原村の意識が強

く残っていたためであろう。この薬師如来坐像は現在地の住吉神社の神宮寺（寺跡がある）にまつられていたことが、同帳「一堂三ヶ所 氏神境内ニ有 薬師堂 別当神宮寺」で確認できる。それ以前は、田原城にも住吉神が祀られて石造物も古いとのことなので、田原城の可能性もある。天野川の水源に近い場所に鎌倉時代に磐船石を勧請してその本地仏をまつたことは、水田耕作と飲料に極めて重要な水を守護する役割を他の天野川沿いの地よりも期待してのことであろう。ところで、厨子は大坂日野屋治右衛門が元文5年（1740）に寄進しているのであるが、その10年後の寛延3年（1750）に他の一人と⑦大日如来坐像を、寺院名は不明ながら、寄進していることがその光背銘によってわかる。したがって、この大日如来坐像も現住吉神社の神宮寺から移安された可能性が高い。

本寺伝来の仏像であることが判明したものもある。⑬不動明王及び二童子像は不動の台座の最下部の輻座にそのことが記されていた。寛文9年（1669）に法元寺上之坊の実清が制作したものである。この「上之坊」は⑭弘法大師坐像の台座銘の「上ノ坊」の可能性もある。この弘法大師像には文政10年（1827）、上ノ坊秀寛が施主として制作したものである。ところで、法元寺には幕末に寺子屋を開き、地域社会の啓蒙に努めた秀盛がおり、近い時期に「秀」の字が共通するところから師弟関係と推定され、「上ノ坊」は法元寺上之坊としてよい。

そして、⑬地藏菩薩立像は、台座内の銘によると享保15年（1730）に、下田原の字地の一つ、瀧寺村の2人が施主となり、寺院名は不明ながら住持実栄の代に寄進されている。⑭不動明王及び二童子像からほぼ60年後のことではあるが、字地が至近であり、住職名実清の「実」が共通することから、この地藏菩薩立像も法元寺本来の像と考えられる。

以上から、⑬地藏菩薩立像、⑭不動明王及び二童子像、⑮弘法大師坐像の3件は法元寺伝来の像であることがわかった。

また、天保15年（1844）の『上田原差出明細帳』には、寺は5ヶ寺あるが、下田原村には明細帳が存在しないので下田原村の当時の寺数は不明である。今回、⑯地藏菩薩坐像の光背銘により、正福寺の存在が確認できたのは、大きな成果である。

このように、法元寺に安置されている仏像には法元寺、神宮寺、正福寺という寺名が確認された。このことを裏付けるように、現在の法元寺にはたくさんの仏像が、本堂内にコの字型に安置されている。しかも正面壇、脇壇、両翼と区別されているように見える。すなわち、本堂内陣正面に4件安置されているが、法元寺本来の⑭不動明王及び二童子像が安置されており、本尊の⑤大日如来坐像が中央に豪華に荘厳されて一段高いたて上り蓮台に結跏趺坐する。この壇上の仏像4件のうち2件が法元寺本来の仏像である。そして、法元寺本来のものであることが確実な⑬地藏菩薩立像は、中央壇に向かって右壇の位牌の中に安置されて、法元寺関係の故人の救済に努めておられる。したがって、正面壇上の仏像群は本寺本来の仏像の可能性が高いと考えてよいだろう。もう一体の、本寺伝来が確実な⑮弘法大師坐像は、中央壇の弘法大師坐像とどのような関係になるのであろうか。これは想像であるが、近年ほどど弘法大師坐像は全面的に彩色を新しくした。その際、安置場所に錯誤が起こった可能性を否定できない。それでは、後の一体の⑯十一面観音立像はどのような意味を持っているのであろうか。この観音像は、面部をはじめ大幅な改変により制作期が把握しにくい、一木造りの構造、深い面奥・体奥、下半身のどっしりとした安定感、耳などに残る厚みのある彫りなどから、平安時代10世紀ころの作と推定される。下半身背面の大きな節穴のある材をわざわざ使用しているところから、霊木に類した樹木から造像した可能性がある。ところで、寺蔵の『正徳六年（1716）法元寺修築願』（『四條峡市史 第二巻（史料編1）』）には、本寺は元禄8年（1695）までは高野山蓮華谷宝聚院末であったが、翌年に仁和寺普提院末になったことが記されている。そのことと、この十一面観音像が本尊脇にまつられていること、現本尊の大日如来坐像が江戸時代のほぼこのころの作と推定されることから、本寺の変更に伴い、十一面観音立像から大日如来坐像への本尊の交代があったのではないかと推定される。と同時にこの十一面観音像は、法元寺の創建が平安時代にまで遡る可能性を示唆している。このように、法元寺の仏像が内陣中央にほぼ集中して安置されていることを念頭に、外陣に向かって左壇を見ると、①薬師如来坐像が脇侍の④日光・月光菩薩立像と共にまつられている。そして⑦大日如来坐像は子思通り、神宮寺薬師如来坐像と同じ壇に安置されている。⑮不動明王坐像、⑮弘法大師坐像が安置されている。おそらくこれらは上田原村神宮寺からの一括の移安であろう。そしてこの壇からカギ

型に手前に設けられた壇上には、②阿弥陀如来立像、③阿弥陀如来坐像、「正福寺」銘の④地藏菩薩坐像が安置されている。これらは正福寺からの移安の可能性が高い群像としてよいのではないだろうか。そうであれば、②阿弥陀如来立像（両手が後補なので尊名は不明）が平安時代10世紀後半頃の作と推定されるので、正福寺の創建も平安時代に遡る可能性が出てくる。

彫刻調査で判明したことは多くはないが、この成果を出発点として、他の分野の調査・研究を行い、法元寺の歴史研究をさらに深める必要がある。それがこの田原地区の歴史の解明に大いに役立つことを確信しているからである。

最後に、実は法元寺の仏像調査は平成元年（1989）1月31日に行っている。この時は時間があまり取れなくて写真はストロボ撮影、データは必要最小限で済まさざるを得なかった。その結果は、大阪府が国庫補助事業で行った、歴史の道調査の報告書『歴史の道調査報告書 第4集 奈良街道』（平成元年3月31日発行）に時代の古い作品のみ写真を掲げて解説を行っている。その時に比べると、今は大変整然と整理されている。その時のわずかの写真と仏像配置の記録を見ると、中央壇には他に、⑤阿弥陀如来立像がある。向かって左脇壇には、現在の諸像の他に、⑯不動明王及び二童子像がある。これはこの壇の前方、カギ型に設けられた手前の壇間際に置かれている。手前の壇上には現在の3体の他、来迎印の④阿弥陀如来坐像と定印の③阿弥陀如来坐像、⑱弘法大師坐像が所狭しと並べられている。⑯不動明王及び二童子像は本来ここに属するものだろう。

この度の調査は前回の拙速に過ぎる調査をもう少し時間をかけたいと希望して、お皆様にご無理をお願いしたものである。お蔭で前回より充実した調査を行うことが出来、上記の成果も上げることができた。これも偏に法元寺ご住職法本豊道様のご厚意のお蔭である。深く感謝申し上げます。また、暑い中、調査に協力いただいた上記の方々、そしてご教示いただいた元奈良大学教授三宅久雄氏にもお礼申し上げます。なお、写真は田中健一氏に多くを負っている。

(吉原忠雄)

(付記)

#### 法元寺略年表

10世紀	⑨十一面観音立像造立（本寺建立の可能性）
室町～江戸	⑤阿弥陀如来立像造立
慶安2年（1649）	法元寺は年貢地で屋敷24歩9升6合上ノ坊である。境内は東西12間、南北14間、葦葺屋根の本堂は梁行4間、桁行5間、葦葺屋根の護摩堂は梁行2間、桁行2間半、と、檢地改帳に記載あり。（「法元寺修築願」）
延享8年（1680）	同内容を檢知改に書付上申。
寛文9年（1669）	法元寺上ノ坊住僧良識実清が⑯不動明王及び二童子像を制作する（台座銘）
元禄8年（1696）	この時まで真言宗高野山蓮華谷宝聚院末寺であった（「法元寺修築願」）
元禄9年（1696）	真言宗仁和寺菩提院末寺になる（「法元寺修築願」）
正徳6年（1716）	法元寺護摩堂破損により、住持実栄などが奉行所へ再建願書を提出した。（「法元寺修築願」）
享保15年（1730）	法元寺実栄が滝寺村甚六、弥平次を施主に④地藏菩薩立像を制作する（台座銘）
文政10年（1827）	法元寺上ノ坊秀覚が⑱弘法大師像を制作させる（座銘）
弘化3年（1846）	法元寺が下田原村庄右衛門の娘ちうの嫁入りに馬場村正圓寺へ「宗旨送り状」を発行する。（「宗旨送り手形之事」）
幕末	法元寺秀盛が寺子屋を開く
明治	上田原神宮寺から⑳薬師如来坐像、㉑日光・月光菩薩立像、㉒大日如来坐像と㉓不動明王及び二童子像、㉔弘法大師坐像が法元寺へ移安された。 下田原正福寺から②阿弥陀如来立像、③阿弥陀如来坐像、④地藏菩薩坐像そして③阿弥陀如来坐像、④阿弥陀如来坐像、⑱弘法大師坐像、⑯不動明王及び二童子像が法元寺へ移安された。





图1 ①药师如来坐像 全身 正面



图2 ①药师如来坐像 全身 左侧面



图3 ①药师如来坐像 厨子扉裏陰刻



图4 ②阿弥陀如来立像 全身 正面



图 5 ②阿弥陀如来立像 全身 左侧面



图 6 ③阿弥陀如来坐像 全身 正面



图7 ⑦大日如来坐像 全身 正面

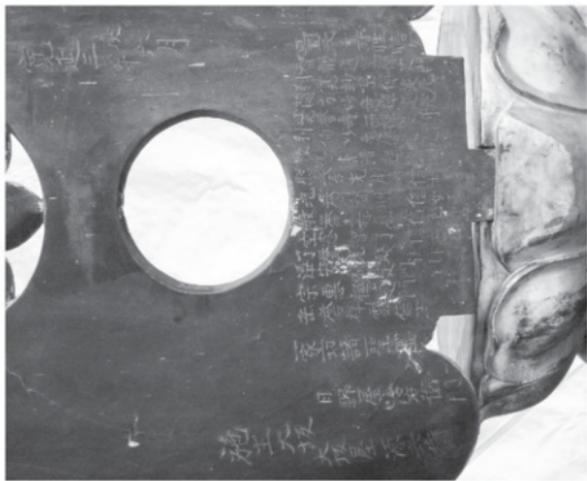


图8 ⑦大日如来坐像 光背背面陰刻  
(写真補正)



图9 ⑨十一面观音立像 全身 正面



图10 ⑩地藏菩萨立像 全身 正面



图 12 ⑬地藏菩薩坐像 全身 正面



图 11 ⑬地藏菩薩立像 台座銘



图 13 ①地藏菩薩坐像 光背身光部表面陰刻

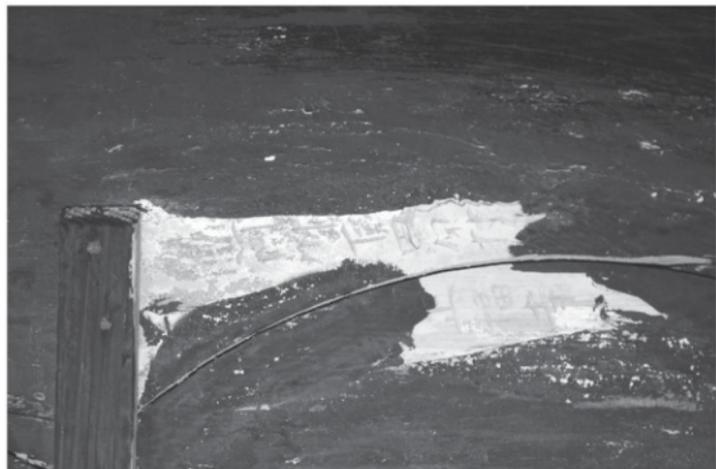


图 14 ①地藏菩薩坐像 光背身光部裏面陰刻



图 15 ⑬不动明王及ひ二童子像 全体 正面



图 16 ⑬不动明王及ひ二童子像 全身 正面



图 18 ⑥不动明王及び二童子像 全体 正面



图 17 ⑤不动明王及び二童子像 台座裏墨書

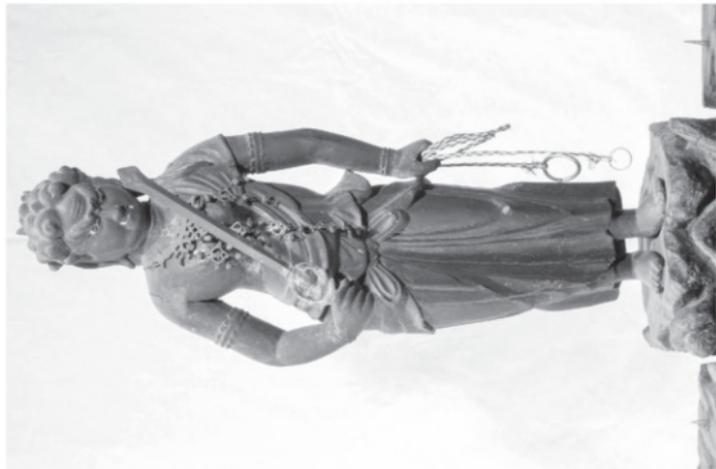


图 19 ⑥不动明王及び二童子像 不动明王立像 全身 正面

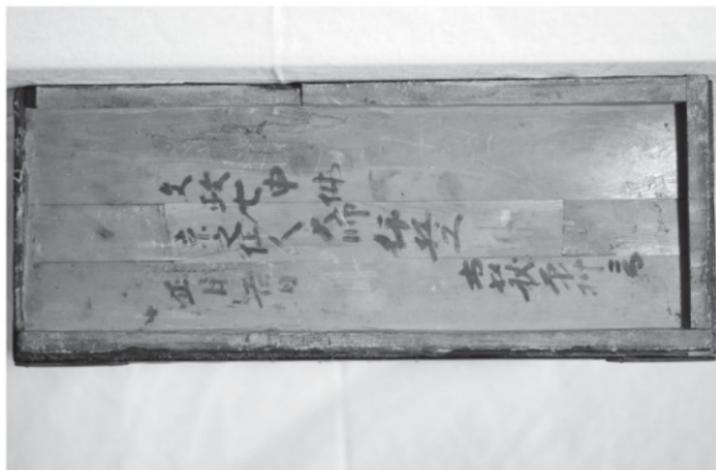


图 20 ⑥不动明王及び二童子像 不动明王台座内側墨書



图 21 不动明王坐像 全身 正面



图 22 不动明王坐像 像底墨书

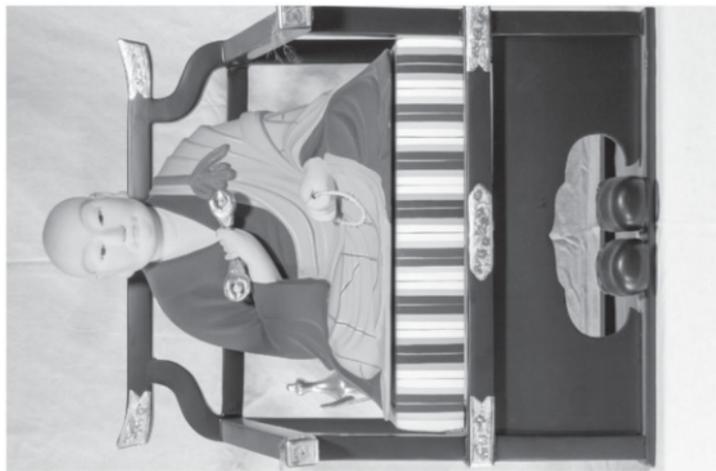


图 23 弘法大师坐像 全身 正面



图 24 弘法大师坐像 木座右外侧陰刻

## 第2章 講座記録

### 邪馬台国と卑弥呼の鏡

本章では、平成23年6月に四條畷市立歴史民俗資料館で行った一連の歴史講座の記録を掲載する。講座は全四回開催し、第1回から3回までが歴史民俗資料館研修室での講座で、第4回は遺跡散策を行った。ここでは講座部分の記録を掲載する。第1回は平成23年6月7日に、原題を「魏志倭人伝の国々—対馬国から邪馬台国まで—」として行い、32名の参加があった。本章の第1節がその記録にあたる。第2回は6月14日に行い、32名の参加があった。本章の第2節がその記録にあたる。第3回は6月21日に行い、34名の参加があった。本章の第3節がその記録にあたる。第4回は6月28日に、奈良県天理市・桜井市で纏向遺跡と周辺古墳を巡る散策を行い、31名の参加があった。ここでは第1回から3回までの講座部分の記録を掲載する。各回に提示した参考文献および用語解説は最後に一括しまとめる。

#### 第1節 魏志倭人伝の国々と四條畷—対馬国から邪馬台国まで—

##### 1. はじめに—今回の講座の狙い—

この講座では、まず三回の講座で、邪馬台国とそれを取り巻く国々について、そして卑弥呼が中国からもらったという銅鏡などについて学んでいきます。そして、最後の四回目、卑弥呼や邪馬台国と関わりが深いと言われる、箸墓古墳や黒塚古墳など、纏向遺跡とその周辺の古墳を見て回ろうと思います。

邪馬台国は、いまだにその所在地も分かっておらず、わたしたちの心をつかんで離さない古代史上の謎の一つです。卑弥呼が中国からもらったという「銅鏡百枚」も同じで、それがどんな鏡なのかはいまだにわかりません。今回はこれらの謎に、私も含め皆様と一緒に、これまで言われている事柄を学びながら、せまっていきたいと思います。

##### 2. 「魏志倭人伝」とは

「魏志倭人伝」という単語は、皆さんも歴史の授業などで聞かれたことがあるかもしれません。ですが、これが実際に一体どういうものなのかというと、ご存じない方もおられるでしょう。

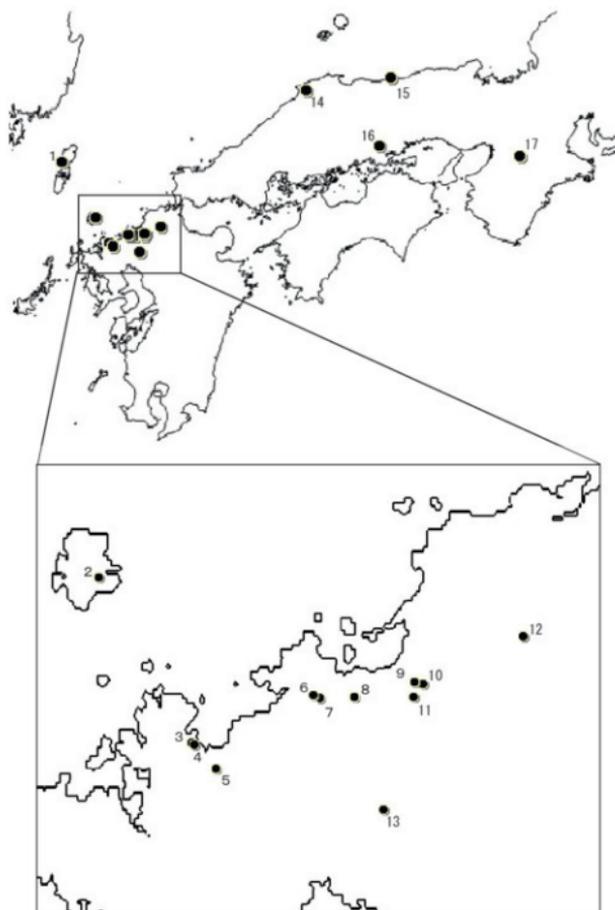
実は、「魏志倭人伝」という本は、本当は存在しません。本当は、中国の有名な歴史書『三国志』の中の、『魏書』という本に、「烏丸鮮卑東夷伝」という章があり、その中の「倭人条」という部分のことを、通称で「魏志倭人伝」と言っています。ここには、当時伝えられた、倭人の習俗や、政治形態、歴史などについて書かれており、書かれた時期からいけば倭人について詳しく触れている最も古い本で、日本の歴史を探る上で非常に重要なものとなっています。ここからは、上記の「倭人条」のことを、分かりやすいように通称で「魏志倭人伝」と呼ぶことにします。

##### 3. 「魏志倭人伝」に載る国々

これから「魏志倭人伝」に載っている国々について、見ていきたいと思っています。場所がおおよそ分かっていない国については、遺跡の説明も交えながら、見ていきたいと思っています。

**対馬国** 現在の長崎県の対馬にあたります。「魏志倭人伝」には、「居する所絶島にして、方四百余里ばかり」などとあります。山が険しく森が多くて、道は獣道のようなものである、良い田はなく、海産物を食べ、船で交易している、とあり、対馬の状況と合致しています。千余戸があったとされています。対馬市の木坂石棺群では、弥生時代後期（約1900年前<sup>11</sup>）の祭り用具である武器形青銅器などが墓に

<sup>11</sup> ここで述べる弥生時代の実年代については、2010年発行の大阪府立弥生文化博物館図録「邪馬台国—九州と近畿—」の年表に準拠しました。



1. 長崎県木坂石棺群 2. 長崎県原の辻遺跡 3. 佐賀県葉畑遺跡 4. 佐賀県桜馬場遺跡  
 5. 佐賀県宇木汲田遺跡 6. 福岡県平原遺跡 7. 福岡県三雲南小路遺跡・井原鎌溝遺跡  
 8. 福岡県吉武高木遺跡 9. 福岡県板付遺跡 10. 福岡県金隈遺跡 11. 福岡県須玖岡本遺跡  
 12. 福岡県立岩遺跡 13. 佐賀県吉野ヶ里遺跡 14. 島根県西谷墳墓群 15. 鳥取県青谷上寺地遺跡  
 16. 岡山県榑築墳丘墓 17. 奈良県纏向遺跡

図 25 今回取り扱う遺跡の位置 (カシミール 3 D による)



図 26 現在の佐賀県宇木汲田遺跡（末盧国）



図 27 現在の佐賀県桜馬場遺跡（末盧国）



図 28 佐賀県菜畑遺跡（末盧国）の復元水田



図 29 福岡県三雲南小路遺跡（伊都国）



図 30 福岡県井原鑿溝遺跡推定地



図 31 現在の福岡県平原遺跡

副葬されて出土していて、この島に国があったのは確かなようです。

**一支国** 現在の長崎県志岐にあたります。「魏志倭人伝」には、「方三百里」ほどで、竹木の茂る林が多く、三千ほどの家があると書かれています。ここもやはり海を渡り交易していたといえます。このことを証明するように、志岐市の原の辻遺跡では、弥生時代中期（約2100年前）に作られた港が見つかっています。

**末盧国** 現在の佐賀県唐津市付近が中心であったと考えられます。「魏志倭人伝」には、末盧国について、「四千余戸有り」とあります。唐津市の宇木汲田遺跡では、弥生時代前期末から中期初頭（約2200年前）にかけての、朝鮮半島からもたらされた鏡や銅剣を副葬した墓が見つかっています。唐津市板馬場遺跡は、弥生時代後期前半（約2000年前）の王墓で、後漢鏡二面や青銅製品などが副葬されていました。また、唐津市菜畑遺跡は、日本で初めて水田での稲作を始めたムラのひとつで、縄紋時代の終わり頃（約2600年前）の水田跡が見つかっています。

**伊都国** 現在の福岡県糸島市付近が中心であったと思われます。「魏志倭人伝」では、「千余戸有り」とあり、特別人口は多くなかったようですが（ただし「万余戸」だとも言われます）、邪馬台国以外では唯一「世々王有り」と書かれています。また、ここには「一大率」という監察官のような役人の治所があったと書かれており、特別な機能を持っていた国だったようです。魏から使者が遣わされた際は、いつもこの伊都国に滞在していたと書かれています。

代々王がいたことを証明するように、伊都国の範囲内では、糸島市の三雲南小路遺跡、井原鏡溝遺跡、平原遺跡と、時期の異なる三つの王墓が見つかっています。

三雲南小路遺跡は、弥生時代中期後半（約2050年前）の遺跡で、江戸時代に大量の銅鏡が出土しました。長らく場所が不明でしたが、近年の発掘でその場所が再確認されました。ここでは二つの甕棺墓が見つかっていて、それぞれ35面と22面以上の鏡が見つかりました。いずれも前漢の鏡ですが、35面副葬されていた墓のほうがより大きい鏡を副葬していました。また、こちらには前漢からもたらされたガラス製品や棺桶用金具も副葬されていました。こちらが王墓で、もうひとつは近親者のものとされています。

井原鏡溝遺跡は、弥生時代後期（約1900年前）の遺跡で、ここも江戸時代に21面の後漢鏡を副葬した王墓が見つかりました。この遺跡は現在詳細な位置は不明ですが、江戸時代の学者青柳種信が出土したものの図面など詳細な記録を残しています。

平原遺跡は、弥生時代終末期（約1800年前）の遺跡で、方形周溝墓から40面の鏡が割られた状態で見つかりました。そのうち5面の内行花紋鏡は、直径が約46cmもある大きなものでした。副葬品に武器が含まれないこと、装身具が豊富なことなどから、被葬者は女性であったと推定されています。

**奴国** 現在の福岡県福岡市博多区・春日市付近が中心であったと考えられます。「魏志倭人伝」では、奴国について、「二万余戸有り」とあります。魏志倭人伝に出ている国で、戸数が万を越えているのは、他に投馬国と邪馬台国だけであり、かなり大きな「国」だったと思われます。そのことを裏付けるように、福岡市金隈遺跡では、400基以上の甕棺墓や木棺墓などからなる集団墓地が見つかっています。また、福岡市板付遺跡は、稲作開始のころの集落として著名です。

この奴国の王墓とされるものが春日市の須玖岡本遺跡にあり、明治時代に前漢鏡約30面を副葬した弥生時代中期後半（約2050年前）の甕棺墓が見つかっています。また、江戸時代に志賀島から「漢委奴国王」と記された金印が見つかっています。これは一般的に、「かんのわのなのこくおう」と読まれ、後漢書にある、「倭奴国」が後漢の初代皇帝光武帝から西暦57年にもらった金印のこととされています。

この奴国は青銅器やガラス製品などを作る当時の工業団地のような場所でもあったようで、上記の須玖岡本遺跡を含む春日市の須玖遺跡群では、様々な場所から青銅器やガラス製品の鋳型や、鋳造した後に出るクズなどが見つかっています。

**不弥国** 現在の福岡県飯塚市付近にあたるという意見があります。「魏志倭人伝」には、千あまりの家があったとされます。飯塚市の立岩遺跡では、前漢鏡6面などを副葬した弥生時代中期（約2100年前）の甕棺墓が見つかっていて、王の墓と考えられます。またこの遺跡は石砲丁などの石器を製作する拠点だったようで、未完成品が大量に出土しています。



図 32 現在の奴国の様子



図 33 現在の福岡県須玖岡本遺跡



図 34 現在の須玖岡本遺跡青銅器工房跡



図 35 現在の福岡県立岩遺跡



図 36 現在の佐賀県吉野ヶ里遺跡



図 37 吉野ヶ里遺跡の「王族墓」

投馬国 まだ、どこにあったのか分かっていません。「魏志倭人伝」には、「五万余戸」があったとされており、かなり大きな国だったようです。吉備（岡山県）、出雲（島根県）、あるいは肥前（佐賀・長崎県）などに比定されています。

#### 4. 邪馬台国への道

次に、この時代の、魏志倭人伝に載る国以外の遺跡を見てみましょう。ここでは、北部九州・山陰・山陽・畿内について、見ていきたいと思います。

はじめに、有名な佐賀県の吉野ヶ里遺跡を見てみましょう。ここは、弥生時代後期（約1900年前）を中心とした集落遺跡です。遺跡は居住域のほか、首長の居館や市と考えられる部分がありました。墓地も見つかっていますが、「王族」のものと考えられる副葬品の豊富な甕棺墓だけが、墳丘を持った墓に葬られていました。

次に、福岡県の吉武高木遺跡があります。ここでは、弥生時代中期初頭（約2200年前）の、朝鮮半島の鏡や銅剣などを副葬した墓が見つかっており、王墓の初現ともされます。少し離れていますが、ここも奴国の一部だとする意見もあります。

次に、島根県の西谷墳墓群を見たいと思います。西谷墳墓群は、弥生時代後期（約1900年前）の、出雲地方を治めた首長の墓といわれる墳墓群です。ここでは、中国山地と山陰、そして北陸地方にしか見られない「四隅突出型墳丘墓」という墓が作られています。何代かにわたって墳墓が作られており、山陰地方には独特の文化を持つ勢力がいたのかもしれませんが。

鳥取県の青谷上寺地遺跡は、弥生時代後期（約1900年前）を中心とした集落遺跡で、弥生時代の人の脳が見つかった遺跡として著名です。ここでは集落を囲う環壕で、多くの人骨が折り重なるように見つかりました。その中には骨にまで達する傷を負ったり、矢じりが刺さったりしたままの骨もあり、戦いで殺された人々がそのまま葬れることなく溝に投げ込まれたものようです。「魏志倭人伝」には、卑弥呼が王として立てられる前に、「倭国大乱」があり、国々が争いを何年も続けていたとあります。この遺跡はそのことを示す遺跡だといえるでしょう。

岡山県の橋築墳丘墓は、弥生時代後期後半（約1850年前）のもので、直径40mの円形部分の両側に突出部がつき、全長80mほどになるとされています。この時期の墳墓としては卓越した規模を持っています。発掘調査では、埋葬施設から鉄剣や勾玉・管玉などの玉類が見つかりました。円形部分の墳丘上には、大石が立て並べられています。また、かつては墳丘上にあった橋築神社のご神体として、「弧帯紋石」と呼んでいる紋様の彫り込まれた石が現在でも祀られています。

奈良県の纏向遺跡は、弥生時代終末期から古墳時代前期（約1800～1700年前）にかけての集落遺跡と墳墓・古墳群です。最盛期である古墳時代初頭の遺跡の面積は2.7kmにおよびます。近年遺跡の中心域で大型建物が整然と並んでいるのが明らかになり、話題を呼びました。

橋本輝彦によれば、纏向遺跡には竪穴式住居はほとんど存在しないといえます。纏向遺跡で確認されている竪穴式住居は合計3棟で、いずれも纏向遺跡が廃絶へと向かう古墳時代前期（約1700年前）のものだそうです。このことから、纏向遺跡に住んでいた人々は、平地式や高床式などの建物に居住していたとされています。平地式や高床式の建物は、身分の高い人物にのみ用いられたと考えられますが、それが纏向遺跡では普遍的に見られる居住形態となっています。このことから、纏向遺跡に居住していた人々はいわゆる身分の高い人物を中心としていたと言えるでしょう。この遺跡は「ムラ」の範疇を超えた「王都」のようなものであったと考えられます。

#### 5. 邪馬台国と四條畷

九州で伊都国や奴国が栄えていたころ、四條畷では雁屋遺跡が、北河内地域の拠点的な集落として栄えていました。雁屋遺跡は、弥生時代中期（約2100年前）の方形周溝墓の発掘が著名で、1985年度の旧暖生会病院建設の時の調査では4基の方形周溝墓から合計21基の埋葬施設が見つかり、遺存状態の良い当時の木棺や人骨が多数見つかった遺跡です。

弥生時代後期（約1900年前）の雁屋遺跡では、1985年度の旧暖生会病院建設の時の調査で周溝墓が確認されており、そこで出土した土器から、丹後・出雲・近江などの地域と交流を持っていたこと



図 38 現在の福岡県吉武高木遺跡



図 39 現在の島根県西谷墳墓群



図 40 鳥取県青谷上寺地遺跡の展示館



図 41 現在の岡山県楯築墳丘墓



図 42 現在の奈良県纏向遺跡



図 43 雁屋遺跡出土の播磨（兵庫県）の土器

が分かりました。また、2010年に宅地開発に伴って行った調査では、播磨地域との交流を示す弥生時代中期後葉の土器が見つかりました。このように様々な地域と交流を持っていたことは、雁居遺跡が単なる一集落にとどまらず、この地域一帯における拠点であったことを示しています。

## 6. 邪馬台国の位置—九州説と畿内説—

さて、それでは、ここから邪馬台国へと歩を進めてみたいと思います。邪馬台国のあった場所については、様々な意見があり、まだわかっていません。大きく分けると、北部九州説、畿内説、それ以外の場所説の三つの説があります。このうち有力なのは、北部九州と畿内の二つの説です。

これら二つの説を対比するには、「魏志倭人伝」の内容を頭に入れておくことが必要です。特に注意しておきたいのは、邪馬台国の人口、そしてその位置に関する記述です。

それぞれの説の概略を見ていきましょう。北部九州説は、はじめ江戸時代の新井白石によって唱えられたものです。明治時代に東京大学の白鳥庫吉が、「魏志倭人伝」の記述のうち、朝鮮半島の帯方郡から女王国までが一万余里（当時の中国の1里＝434m）あまりと書いてあることに注目しました。魏志倭人伝に距離の載っている帯方郡から不弥国までの距離を足すと一万七百里あまりとなるので、不弥国から女王国は千三百里となります。それで、邪馬台国は九州としか考えられないとして、その場所を肥後（熊本県）と想定しました。

次に考えておきたいのは、榎一雄の説です。彼は、邪馬台国への行程の記事のうち、伊都国までとそれ以降とで書き方が異なることに注目しました。彼は、魏の使者は伊都国にとどまっていると書かれていることもあり、伊都国以降は、すべて伊都国起点での距離や日数が書かれていると考えました。こうして考えると、やはり邪馬台国は九州に収まることとなります。

もうひとつ、安本美典の説を考えて見ましょう。彼は、位置の分かっている国までの、「魏志倭人伝」にかかれた距離と、実際の距離とを比較して、そこから「魏志倭人伝」に書かれている距離は当時の中国の単位ではなく、1里＝約90mで書かれているとしました。この考えに従えば、邪馬台国の位置は無理なく九州に収まります。また、行程の記事以外の部分でも、「女王国が伊都国の南にある」と書いてある部分があることをあげ、やはり邪馬台国は九州の範囲内にあったと考えました。

次に、畿内説について見てみます。畿内説を最初に主張したのは、おそらく『日本書紀』の編者でしょう。実は、『日本書紀』には、魏志倭人伝の卑弥呼の記述が引用されています。仲哀天皇の後の神功皇后について書かれた部分で、卑弥呼のことが述べられており、『日本書紀』の編者は卑弥呼を神功皇后のことと考えたものと思われます。

それから、畿内説は連綿と唱えられ続けます。明治時代には、京都大学の内藤虎次郎が、中国の歴史書には、記述される方角に誤りがあることがよく見られることを示しました。そして、「魏志倭人伝」に邪馬台国は「七万余戸」の人口の大国と書かれていることから、九州の北部から中部には求められず、その記述の「南」は「東」と読み替えるべきだと考え、邪馬台国はやはり大和であるとなりました。

考古学者の水野正好は、「魏志倭人伝」に、「邪馬台国」とある部分と「女王国」とある部分があることに注目しました。この中で、帯方郡からの総距離が書かれている部分は、「女王国」までが一万余二千里あまりだと書いてあります。一方で、投馬国からの行程の部分の記述では、「水行十日、陸行一月、邪馬台国に至る」とあります。このことから、「邪馬台国」とは、卑弥呼の王都がある地のことで、「女王国」は、卑弥呼の直接統治が及んでいる範囲であるとした。九州の国々については、伊都国に置かれた「一大率」を通じて、女王国に属していたものと考えました。こうして考えれば、投馬国から船では十日、陸では一月の位置にある邪馬台国は畿内の大和ということになります。

ここまで、邪馬台国北部九州説と、畿内説のそれぞれについて概観してみました。邪馬台国はいったいどこにあったのでしょうか？

ところで、ここまで見てきた考えは、すべて文献上の記載に基づいて唱えられた説です。では、考古学上の発掘成果からはどのように考えることができるのでしょうか。この際に重要になってくるのが銅鏡です。今回は、銅鏡から邪馬台国について紐解いていく前段階として、銅鏡にはどういった種類があるのか、そしてそれらの鏡にはどんな意味があるのか、調べることにしたいと思います。

## 第2節 邪馬台国と青銅鏡—弥生時代・古墳時代の鏡—

### 1. はじめに

ここまでで、「魏志倭人伝」に載る国々について、そして邪馬台国の位置は文献からはどのように想定されているのかについて、調べることができました。本節では、邪馬台国について考えていくうえで欠かせないものである青銅鏡について、少し調べてみたいと思います。

### 2. 青銅鏡とは

青銅製の鏡は、木製品のように土中で朽ち果てることもなければ、鉄製品のように元の形が判らなくなってしまうほど錆びるということもあまりなく、美しい紋様を保ったまま出土するため、古くから注目されていた遺物のひとつです。わたしたちは、現在でこそガラスに金属等を塗ったものを鏡として使っていますが、明治時代ごろまでは鏡といえば金属製、それも青銅でできたものが中心でした。青銅というのは、銅と錫などを混ぜて作った金属です。身近なものでは現在の十円硬貨が青銅製です。青銅は銅と錫の比率によって色が変わり、銅の比率が高いと（9割程度以上）十円玉のような赤銅色に、銅の比率が相対的に低めだと白銅色になり、その中間の比率だと黄銅色になります。弥生から古墳時代の鏡は、白銅～黄銅色のものが多かったようです。

この青銅でつくった鏡は、中国大陸や朝鮮半島で作られたものが弥生時代になって初めて日本列島にもたらされました。当時の日本列島（倭）の人々は、光り輝く銅鏡に神秘的なものを感じたようで、墓に大量に副葬したり、割れた鏡をさらに磨いて儀式などに使用したりと、大陸とは違った使われ方をしている例が多くあります。

### 3. 銅鏡に関する用語

- 鈕**：中央にある、つまみのように盛り上がっている部分。鈕を通すあな（鈕孔）があいています。
- 鈕座**：鈕が乗っている、鈕の周りの高まりです。
- 内区**：鈕座の外側の、紋様が描いてある部分。鏡の名称の元となる、神や獣などの紋様（主紋様）が描かれている部分です。
- 外区**：内区よりもさらに外側の部分で、内区より一段高くなっていることが多い部分です。
- 乳**：内区の中にある小さな突起のようなもの。内区の中を区画に分ける意味を持つものです。

### 4. 鏡の種類と意味

それでは、鏡の種類と、それぞれの鏡の紋様を持つ意味について、弥生時代の遺跡で見つかる鏡から、古墳時代の三角縁神獣鏡まで、古い時代のものから順番に見ていきましょう。日本列島で出土する鏡について、見ていきたいと思います。

**多鈕細紋鏡** 朝鮮半島で作られた鏡です。鈕を通す穴のある鈕が二つあることと、紋様が非常に細かいものになっていることから、この名があります。日本列島では主に弥生時代中期前半（紀元前2世紀）の遺跡から見つかります。福岡県吉武高木遺跡や、佐賀県宇木汲田遺跡では、甕棺墓に副葬されていて、日本列島における王墓の初現とされています。また、柏原市大県遺跡では、大正時代の開墾中に、単独で埋められていたものが見つかっています。

**異体字銘帯鏡** 前漢代（紀元前2～1世紀）に中国で作られた鏡です。銘文が「ゴシック体」などと表現される、特徴的な字体で書かれているため、この名があります。銘文が書いてある部分である「銘帯」が1列のものと2列のものがあります。1列のものの中には、銘帯よりさらに内側に半円形の紋様を連ねたもの（内行花紋）があるものがあり、これは後に述べる内行花紋鏡の元となりました。「魏志倭人伝」に載る伊都国の王墓のひとつである福岡県の三雲南小路遺跡や、不弥国に比定する意見もある福岡県立岩遺跡などから出土しています。

**方格規矩四神鏡** 前漢の終わりから後漢にかけて（前1世紀から後2世紀）中国で作られた鏡です。「方格」は、内区にある鈕を囲う四角形の部分のことです。「規矩」というのは、物差しとコンパスのことで、紋様の中にあるアルファベットのT、L、Vに似た形をした図形が、「規矩」を表している

考えられたため、この名があります。「四神」は、青龍・白虎・朱雀・玄武のことで、それぞれ東西南北を表す中国の聖獣です。方格規矩四神鏡には、この四神を含め、様々な中国の聖獣が描かれています。弥生時代終末期（約1800年前）の伊都国の王墓である福岡県平原遺跡で出土した鏡のなかで最も多かったのはこの種類の鏡です。茨木市紫金山古墳では、この鏡が4世紀後半の古墳から副葬品として見つかっていて、何代にもわたって大切に伝えられてきた鏡（伝世鏡）だともいわれています。

**内行花紋鏡** 後漢の時代（1世紀から2世紀）に中国で作られた鏡です。内区には半円形の紋様があり、これを花びらに見立てて、花のような紋様ということでこの名で呼んでいます。福岡県平原遺跡の、約46cmある日本最大の銅鏡はこの種類の鏡ですが、日本列島で作られたものとされています。

**画紋帯神獣鏡** 後漢の終わり頃から三国時代にかけて（2世紀から3世紀）、中国で作られた鏡です。その縁は平らなので「平縁」といいます。「画紋帯」とは、外区部分に天上の世界を表した画像が描かれた紋様帯のことです。内区には神や聖獣が描かれているので、「神獣鏡」といいます。多くは中国大陸の南方の呉の地域で作られたものです。奈良県の黒塚古墳では、画紋帯神獣鏡1面だけが、棺の中に副葬されており、被葬者が大事にしていた鏡だったことが窺えます。一方で、内区の紋様がすべてひとつの方向を上にして描かれている画紋帯同向式神獣鏡という種類のものは、大陸北方の地域で作られたものと考えられます。この画紋帯同向式神獣鏡は、奈良県のホケノ山古墳などから出土しています。

**斜縁神獣鏡** 中国で三国時代（3世紀）に作られた鏡です。一番外側の縁の断面が、平縁と比べて少し盛り上がっていますが、三角縁のように二等辺三角形ではなく、緩やかな立ち上がりのものを「斜縁」といい、内区には神や聖獣が描かれているので「神獣鏡」と呼んでいます。この鏡は中国の山東半島から遼東半島、朝鮮半島の平壤にかけての地域で作られた鏡です。高槻市の安満宮山古墳などから出土しています。

## 5. おわりに

ここまで、弥生時代・古墳時代の日本列島で見られる主な鏡について概観してきました。しかし、卑弥呼が中国からもらったといわれる鏡がどんなものだったのかについては、あえて触れませんでした。この点に関しては次回、考えてみることにしたいと思います。

## 第3節 卑弥呼の鏡とその後—三角縁神獣鏡と古墳時代—

### 1. はじめに

前節で、青銅鏡にはどういった種類があるのか、そしてその紋様にはどのような意味があるのか、調べることができました。

今回は、卑弥呼が中国からもらった鏡について、そしてその後の鏡の展開について、考えてみたいと思います。

### 2. 三角縁神獣鏡と倭製の鏡

まず、卑弥呼が中国からもらった鏡を考える前段階として、重要な鏡である三角縁神獣鏡について、そして鏡には中国で作られた鏡だけでなく、日本列島で作られた鏡もあるということについて、見ておきたいと思います。

三角縁神獣鏡は、中国の三国時代、日本では弥生時代の終末期から古墳時代のはじめにかけての時期（3世紀）に作られた鏡です。一番外側の縁の断面が二等辺三角形に近い形で、内区には神や聖獣の像が描かれているので、三角縁神獣鏡と呼んでいます。現在のところ日本列島でしか出土していません。3・4世紀の古墳時代前期の古墳の副葬品としての出土がほとんどです。奈良県の黒塚古墳では、33面の三角縁神獣鏡が棺の外に立て並べて副葬されており、出土面数・出土状況ともに注目されました。

青銅鏡の中には、日本列島で中国製の鏡を模倣した鏡が作られたものもあります。当時日本のごとは倭と呼ばれていたため、そういった鏡のことを「倭製鏡」といいます。また、製作地を限定せず、

元の鏡をまねて作った鏡のことを、「倣製鏡」と呼びます（以前は、これらをすべて「仿製鏡」と呼んでいました）。倣製鏡は、中国鏡の紋様の意味をよく理解できていない倭の人々が作ったので、紋様が元の鏡からは想像もつかないほど変化してしまっているものも多くあります。

さて、三角縁神獣鏡は、まだ製作された場所が分かっていない鏡です。中国製とする意見と、日本列島製とする意見とがあります。中国製とする意見は、古く大正時代に、京都大学の富岡謙蔵が、鏡の紋様の特徴と、銘文に魏代にならないと使われない後漢の皇帝の諱が使われていること、「正始元年」（240年）という魏の年号がある鏡があることから、述べていたものです。この説は京都大学の梅原末治、小林行雄によって継承され、小林は三角縁神獣鏡に多く見られる、細部まで同じ紋様を持つ鏡を、同じ鋳型を使って鋳造した「同范鏡」だと考え、その同范鏡の日本列島への広がり方から、三角縁神獣鏡は卑弥呼が魏に使いを出したときにもらってきた鏡を、のちに各地の首長に大王が部下を通じて配布したものだと考えました。三角縁神獣鏡を、卑弥呼が魏からもらった鏡とする説は、島根県の神原神社古墳で卑弥呼の遣使年である「景初三年」（239年）の年号が書かれた三角縁神獣鏡が出土するに及んで、確立されたかに見えました。

一方で、この鏡は中国大陸で1枚も出土していないため、同志社大学の森浩一は早くから日本列島製ではないかと主張していました。1980年代に中国の研究者の王仲殊は、三角縁神獣鏡の元になったとされる種類の鏡は、魏の地域では作られておらず、呉の地域で作られている鏡であるとし、彼は三角縁神獣鏡にある銘文を「絶地亡出」「至海東」と読み、これは遠く東の地に亡命したことを示す銘文だと解釈して、三角縁神獣鏡は、呉から倭に亡命した工人が倭で作った鏡だと考えました。

1986年には、京都府の広峰15号墳で、「景初四年」という、実際にはなかったとされる年号の書かれた鏡が見つかりました。この鏡は、三角縁神獣鏡ではありませんが、三角縁神獣鏡に非常に近い鏡で、同じ工人が作ったと考えられるものでした。この鏡は、日本列島にいた改元を知らなかった工人が作ったものとされて、三角縁神獣鏡が中国製でない証拠とされました。

しかし、三角縁神獣鏡は呉の系譜をもつ鏡ではないということが、近年明らかになってきました。三角縁神獣鏡の鈕孔を見ると、その多くは長方形をしています。これは、他の種類の鏡にはあまり見られない特徴です。大阪大学の福永伸哉によれば、これと同じ特徴をした鏡が中国でも見つかります。それは方格規矩四神鏡なのですが、漢代のものとは、紋様の「L」字の向きが逆であるなど、少し異なる部分があって、漢代ものを模倣した鏡であると考えられます。中国大陸での出土分布から、これらの方格規矩四神鏡は、魏の地域で作られた鏡であることが分かりました。この長方形鈕孔というのは、魏の地域で作られた鏡の特徴のひとつであるようです。

また、これまでは北方の地域の鏡ではないとされていた神獣鏡は、北方の地域にも存在することが分かってきました。斜縁神獣鏡は、その分布から見ると山東半島から遼東半島・朝鮮半島の平壤にかけての地域で作られた鏡ですし、画紋帯同向式神獣鏡についても、北方に主に見られる鏡です。これらの鏡は、三角縁神獣鏡の元になったと考えられる鏡のひとつであり、こういった鏡を模倣して、様々な要素を取り出し合体させ、作り出されたのが三角縁神獣鏡と考えられます。このようにそれ以前の鏡を模倣し、鏡を作るというのは、先の方格規矩四神鏡の例にも見られるように、魏の鏡の特徴であり、その特徴を三角縁神獣鏡も持っているということができます。一方で、呉の地域の鏡は、紋様の表現のやり方も三角縁神獣鏡とは異なっていますし、同じ系譜にあるとみなすことは困難です。三角縁神獣鏡は、やはり魏の工人により作られたと考えることができるでしょう。

### 3. 卑弥呼がもらった「銅鏡百枚」

たとえ魏の工人が作ったとしても、「景初四年」という年号がそれらの鏡に入っているのは確かです。ですが、改元の布令が徹底していたと考えられる中国でも、改元前の年号を使ってしまっている例は、お墓に使うレンガなどで、確かに存在します。またこの時期は、景初三年1月に魏の皇帝（明帝）が亡くなって次の皇帝が即位しましたが、毎年新年を祝うべき正月が前の皇帝の忌日になってしまっただけで、具合が悪いというので、翌年の1月を「景初三年後12月」として先帝の忌日とし、次の月を「正始元年1月」として改元するという複雑な改元が行われています。史書に記述されている経緯でさえこれほど複雑になっていますから、当時のリアルタイムの実務段階では相当複雑なやり取りがあっただ

ろうと考えられます。こうした中であって、景初四年銘の鏡が作られてしまった可能性は、十分ありえるのではないのでしょうか。

このように考えてきますと、三角縁神獣鏡を魏の鏡と考えない積極的な理由は、存在しないと言えます。むしろ三角縁神獣鏡は魏の鏡である特徴を備えていますので、魏の鏡であり、卑弥呼の遣使の年およびその翌年の年号がある鏡が存在することから、やはり卑弥呼が魏からもらったのは、三角縁神獣鏡だと考えるべきでしょう。

では、「百枚」という記述についてはどうでしょうか。三角縁神獣鏡は、日本列島ですでに500枚ほど出土していますので、多すぎると言われることがあります。ですが、三角縁神獣鏡にはいくつかの段階があり、各段階によって作られている鏡の特徴は少し異なっています。この各段階は、鏡が作られた時期の違いをあらわしていると考えられます。日本列島では副葬されている鏡の時期ごとに古墳の時期も違っているということが分かっていますので、鏡の時期ごとに、日本列島へもたらされた時期も異なるのではないかと考えられます。つまり、最初に卑弥呼が魏からもらった「銅鏡百枚」は、三角縁神獣鏡の最初の段階のものだけで、それから何度か卑弥呼や後継者の台与が、魏やそれに続く王朝の西晋に遣使している際にも、各段階の三角縁神獣鏡がもたらされたと考えられることができるでしょう。

この三角縁神獣鏡は、近畿地方を中心に分布しています。三角縁神獣鏡の分布から見ても、邪馬台国は畿内にあつた可能性が高いといえるでしょう。この視点は、仮に三角縁神獣鏡が倭製だったとしても、三角縁神獣鏡に遣使のときの年号がある以上、成立すると言えます。

#### 4. 卑弥呼の鏡のその後

このように、三角縁神獣鏡は卑弥呼や台与が中国からもらった鏡であることが分かりました。中国からもらった三角縁神獣鏡は、「魏志倭人伝」にあるように、「ことごとく國中の人に」示したと考えられます。その証拠が、三角縁神獣鏡が日本列島のいたるところで見つかっていることにあらわれているでしょう。ですが、三角縁神獣鏡は、古墳での取り扱われ方は少し特殊です。特に副葬される鏡の数の多い古墳では、三角縁神獣鏡以外の鏡のほうが、棺内に入れるなど大事に取り扱われ、三角縁神獣鏡は棺外に副葬されるというような例が多く見られます。副葬面数の多い古墳の被葬者は、有力者ですから、三角縁神獣鏡を王権中枢から下賜される以前にも、別の鏡を下賜されるなりして手に入れていることでしょう。そのようにして昔から手元に置いていた鏡は、その被葬者にとっては、個人的な意識としては魏の鏡以上に価値のある鏡であったことと思います。三角縁神獣鏡より被葬者に重要視された鏡を見ますと、方格規矩四神鏡や内行花紋鏡など、三角縁神獣鏡より古い鏡が多く見受けられます。このことも、そのように手に入れた時期の差があったことを示しているのかもしれない。

三角縁神獣鏡は、魏を継いだ西晋に入っても、作られ続けます。早稲田大学の車崎正彦も述べていますが、これまで「倭製（仿製）」三角縁神獣鏡だとされていたものが、その西晋の三角縁神獣鏡だと考えられます。これまで「倭製（仿製）」とされていた三角縁神獣鏡は、紋様を見ると神や獣の像を、しっかりそれと認識して描いてあります。しかし倭で作られた他の種類の鏡は、神や獣がそれとしっかり認識されず、まるで虫のような描かれ方をされています。倭で作られたほかの種類の鏡と、これまで「倭製（仿製）」とされていた三角縁神獣鏡とは、はっきりとした差があります。

313年に倭と中国との玄関口だった楽浪郡・帯方郡が高句麗に滅ぼされ、三角縁神獣鏡は列島に流入しなくなり、終焉を迎えたと考えられます。列島でも鏡の位置づけは変化し、鏡の大量副葬は減って、代わって鉄製品が大量に副葬されるようになっていきます。三角縁神獣鏡がその役割を終えるころには、大王の墓も、作られる場所が大和から河内へと移ります。こうして、三角縁神獣鏡は、王権内での変化とともに、その役割を終えていったといえるでしょう。

#### 5. おわりに

ここまで三回の講座で、第一回目では魏志倭人伝に載る国々と、当時の日本列島の各遺跡の状況について、そして当時の四條畷の状況についても学びました。二回目では、前回の続きで文献から読める邪馬台国の位置について調べ、青銅鏡にはどんな種類があるのかについても、学ぶことができました。

た。そして最後に、卑弥呼が魏からもらった鏡は三角縁神獣鏡であった可能性が高いことを様々な理由から調べ、そしてその後の展開についても考えることができました。ですが、今回お話させていただいたのはひとつの視点を示させていただいたものであり、他の様々な考えを否定するつもりはありません。邪馬台国について、そして卑弥呼がもらった鏡については、いまだに分らないというのが正直なところでして、それぞれの方が自分なりに、ご自分の中で説明をつけてご自分の邪馬台国論を構築すれば、それが正しいことになるだろうと思います。そうやって自分なりに説明をつけていく作業はある意味非常に楽しいもので、それがわたしたち古代史・考古学ファンの心を捉えて離さない点だと思えます。今回は、皆様とご一緒に邪馬台国について、そして卑弥呼がもらった鏡について考えることができ、わたしも自分なりの考えをある程度まとめることができました。皆様はいかがでしたか？この度はどうもありがとうございました。

(實盛良彦)

## 付編. 用語解説

**前漢・後漢** (ぜんかん・ごかん) 前漢は、紀元前 202 年～西暦 8 年まで、後漢は西暦 25 年～220 年まで続いた、中国の王朝。司馬遼太郎の小説「項羽と劉邦」で有名な劉邦が前漢の初代皇帝です。後漢は、前漢の皇族が、前漢を復興する形で興した王朝です。この時代のことを扱った歴史書に、日本列島に関することが初めて出てきます。

**三国時代** (さんごくじだい) 中国で、魏・呉・蜀の三国が分立していた時代。魏の建国の 220 年から、魏を継いだ西晋が呉を滅ぼし中国を統一した 280 年までを指します。

**魏** (ぎ) 220 年～265 年まで続いた中国の王朝。初代皇帝は曹丕で、その父は三国志で有名な曹操。

**呉** (ご) 229 年～280 年まで続いた中国の王朝。初代皇帝は三国志にも登場する孫権。

**蜀** (しょく) 221 年～263 年まで続いた中国の王朝。初代皇帝は、後漢の皇族の子孫とされる、三国志で著名な劉備。正式な国号は漢で、蜀はもともと魏を正統としてみた場合の呼び方だったのが定着したもの。

**弥生時代** (やよいじだい) 今からおよそ 2500 年前から 1750 年前にかけての時期をさします。一般的に、稲作がはじまり、身分の差が広がっていった各地にリーダーが生まれ、やがて「国」へと発展していく時代になります。卑弥呼は、この時代の一番終わりのころに活躍したと言われています。

**方形周溝墓** (ほうけいしゅうこうぼ) 弥生時代の中期 (約 2100 年前) に降よみられる、四角形に溝を掘り、掘った土を真ん中の四角形の部分に積み上げて作るお墓です。土を積み上げたその中に墓穴を掘って棺桶を埋めます。

**古墳時代** (こふんじだい) 3 世紀中ごろから、7 世紀まで続く時代で、支配者などの巨大なお墓 (古墳) が作られたのが特徴の時代です。

## 主要参考文献

石野博信・水野正好ほか 2006 『三角縁神獣鏡・邪馬台国・倭国』新泉社。

江野道和編 2006 『大鏡が映した世界』伊都国歴史博物館。

王 仲殊 1992 『三角縁神獣鏡』学生社。

大阪府立近つ飛鳥博物館編 1995 『鏡の時代—銅鏡百枚—』大阪府立近つ飛鳥博物館。

大庭 脩 2001 『親魏倭王』増補新版、学生社。

岡部祐俊ほか編 2007 『国宝福岡平原方形周溝墓出土品図録』伊都国歴史博物館。

岡村秀典 1984 『前漢鏡の編年と様式』『史林』第 67 巻第 5 号、史学研究会、1 - 42 頁。

岡村秀典 1993 『後漢鏡の編年』『国立歴史民俗博物館研究報告』第 55 集、国立歴史民俗博物館、39 - 82 頁。

岡村秀典 1999 『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館。

春日市奴国の丘歴史資料館編 2005 『春日市奴国の丘歴史資料館常設展示図録』春日市奴国の丘歴史資料館。

鎌ヶ江一朗編 2000 『安濃宮山古墳』高槻市教育委員会。

唐津市末盧館編 1993 『からつ末盧館—菜畑道跡—』唐津市末盧館。

車崎正彦 1999 『卑弥呼の鏡を求めて』『邪馬台国を知る事典』東京堂出版、366 - 408 頁。

- 考古学ジャーナル編集委員会編2011『月刊考古学ジャーナル』No.611、特集「倭人伝」國邑の考古学、ニュー・サイエンス社。
- 小林行雄1961『古墳時代の研究』青木書店。
- 小林行雄1965『古鏡』学生社。
- 小山田宏一1993「面紋帯同式神獸鏡とその日本への流入時期一鏡からみた「3世紀の歴史的特組み」の予察一」『弥生文化博物館研究報告』第2集、大阪府立弥生文化博物館、231 - 270 頁。
- 近藤喬一1988『三角縁神獸鏡』東京大学出版会。
- 近藤義郎2002『桶狭弥生墳丘墓』吉備人出版。
- 坂田邦洋編1976『対馬の考古学』縄文文化研究会。
- 鹿野 豊編2009『卑弥呼死す、大いに家をつくる』大阪府立近つ飛鳥博物館。
- 四條巖市教育委員会編2005『青い鳥が飛ぶ』第20回記念特別展、四條巖市立歴史民俗資料館。
- 實盛良彦2009「斜縁神獸鏡の変遷と系譜」『帝釈道跡群発掘調査年報』XXIII、考古学研究室紀要第1号、広島大学大学院  
文学研究科帝釈道跡群発掘調査室・考古学研究室、97 - 120 頁。
- 實盛良彦・谷口早季2010『ひろしまの鏡と考古学』広島大学考古学同好会。
- 高橋伸幸編2011『歴史人』5月号、No.8、KKベストセラーズ。
- 武光 誠・宮地 忍1998『魏志倭人伝と邪馬台国』読売新聞社。
- 常松幹雄2006『最古の王墓 古武高木道跡』新泉社。
- 寺沢 薫2000『王權誕生』講談社。
- 富岡謙藏1920『古鏡の研究』丸善。
- 橋本輝彦編2007『ヤマト王権はいかにして始まったか』財団法人桜井市文化財協会。
- 樋口隆康1979『古鏡』新潮社。
- 福永伸哉2001『邪馬台国から大和政権へ』大阪大学出版会。
- 正岡大実・中川二美編2010『邪馬台国』大阪府立弥生文化博物館・九州国立博物館。
- 水野正好・白石太一郎・西川寿勝2010『邪馬台国一考古・継道跡から著墓古墳へ』雄山閣。

## 報告書抄録

ふりがな	しじょうなわてしぶんかざいちょうさねんぼう
書名	四條畷市文化財調査年報
巻次	第2号
シリーズ名	四條畷市文化財調査報告
シリーズ番号	第51集
編著者名	實盛良彦(編)・吉原忠雄
編集機関	四條畷市教育委員会
所在地	〒575-8501 大阪府四條畷市中野本町1番1号
発行日	2015(平成27)年3月31日

ふりがな 所収寺社名	ふりがな 所在地	市町村 コード	北緯	東経	調査期間	調査目的
ほうげんじ 法元寺	しじょうなわてし おおあざしもたわら 四條畷市 大字下田原	272299	34° 44′ 12″	135° 41′ 51″	平成24年7月31日 ～平成24年8月4日	市史編さん事業に伴う

四條畷市文化財調査報告 第51集

四條畷市文化財調査年報  
第2号

平成27（2015）年3月31日発行

編 集 四條畷市教育委員会

発 行 四條畷市教育委員会  
大阪府四條畷市中野本町1番1号

印 刷 株式会社 共英印刷所